Akita University

秋田大学教育文化学部研究紀要　人文科学・社会科学部門　68　pp.31～60　2013

ミシェル・ド・セルトーとポール・ウィリス
―― 都市と学校における抵抗としての文化と日常的実践 ――

和　泉　　浩

Michel de Certeau and Paul Willis:
'Manière de faire' in School and Urban Space

Hiroshi IZUMI

Abstract

The purpose of this paper is to consider the relations between the reproduction of modern rationalized social system and its resistant, differentiating or dissimilating components through two famous authors' two famous works of the same period: Michel de Certeau's *L'invention du quotidian: Arts de faire (published in 1980, English title: "the Practice of Everyday Life")* and Paul Willis's *Learning to Labour: How Working Class Kids get Working Class Jobs (published in 1977).*

In *L'invention du quotidian* de Certeau tries to delineate the 'creativity' of 'users' or consumers in everyday practices, who are 'commonly assumed to be passive and guided by established rules.' According to de Certeau, 'users' not only consume various products — from commodity to urban space — of modern rationalized and expansionistic technocracy and capitalism, but also *bricolent (bricolage)* those products in their practices of everyday life where users dissimilate or transgress the control, 'discipline' and plans of producers and technocrats, in which de Certeau finds out the 'creativity' of 'users' and the resistant moments within the existing systems of dominance relationships of 'elite' and 'popular culture.'

In *Learning to Labour*, Willis tries to identify the resistant moments in working class culture, especially 'failed' working class kids and their counter-school culture which oppose to authorities of school, teachers and academic carrier-based pseudo egalitarian institutions and society. He expounds on the reproductive processes of 'working class kids get working class jobs' because of various 'limitations' which distort the 'penetrations' of working class culture which are, he thinks, 'potential materials...for a thoroughly critical analysis of society and political action for the creation of alternatives.'

Willis situates 'creativity' of working class culture in their collective level of the 'penetrations' which exist like Freudian 'unconsciousness' and cannot be seized in utterance or conscious level of working class people, while de Certeau finds the creativity of resistance in everyday surface level practices like speaking, walking, cooking.

This paper has scrutinized the differences between de Certeau's and Willis's ideas of resistant alternative 'creativity' in everyday practices and popular culture, and their positions within the 'reproduction' of modern capitalist class society.

Key Words

Michel de Certeau, Paul Willis, School, Urban Space, *Manière de faire*

通っていった道筋の記録は，それがそうであったもの，すなわち通るという行為そのものを失ってしまう。

ほとんどの場合，技術者たちは……ただ維持と監視の諸機構をさらに拡張し複雑にすることばかり考えているのが現状だ。そんなことをしたとて，なんの保証になるわけでもないのに。どれほど規律をみがいたところで，主体の側のやる気のなさはどうなるわけでもない。

かれらとて，現在の秩序が日常的な現実からすれば不自然であり，その不自然さがそこここで見え隠れしているのに気づかぬはずはない。だがかれらはそれを口にしてはならないのだ。

ミシェル・ド・セルトー

Akita University

1．はじめに

『ハマータウンの野郎ども』（原書 1977 年）で学校にたいして反抗的なイギリスの労働階級の生徒たちの姿を描いたポール・ウィリス。『日常的実践のポイエティーク』（原書 1980 年）で「いまや西欧を支配している合理性」，「拡張主義的で中央集権的な，合理化された生産」にたいして日常的実践での「消費」という形態での「創造性」を描き出したミシェル・ド・セルトー。この同時代の２つの著作，そしてこの２人の著者，いずれもきわめて有名ではあるが，関連づけて論じられることはあまりない。そして，この２人も，それぞれの著作において，互いに言及することはなかったのかもしれない。この２人の，この２つの著作を関連づけて考えてみるというのが本稿での試みであるが，当然，有名だからという理由だけで，著作も人も関連づけて論じられる必要性も，また相互に言及する必要性もあるわけではない。ここで，この２つの著作を関連づけて論じるのは，この２人のこれらの著作には共通する視点と問題関心があるとともに，その共通する問題の可能性について異なる考え方が示されている，この点を明らかにしてみたいからである。

この２つの著作に共通する視点は，依然として重要であることに変わりないとはいえ，こんにちではありふれた，いささか陳腐とさえいえるものになっている。その視点とは，「拡張主義的で中央集権的」な合理的システムに囚われている人びとが，そうしたシステム（あるいは「構造」）に一方的に規定される，たんなる受け身の存在ではなく，そのシステムをそれぞれの置かれた位置，移り変わりゆく状況のなかで継続的に読み替え，みずからのものとし（「我有化」し），利用する主体的な（「パフォーマティヴ」な）存在をなしているというものである。それはまた，合理的なシステムの限界あるいは境界，または多孔性を明るみに出そうとする。

こうした視点は，ド・セルトーが『日常的実践のポイエティーク』のテーマを，ミシェル・フーコーが『監獄の誕生』で鮮やかに描き出した監視と規律の合理的な碁盤目状のシステムと対比させて説明している以下の箇所に明確にあらわれている。

> 「監視」の碁盤目がいたるところにひろがり，ますます精緻化していっているのが真実なら，なおさらのこと，一社会がそっくりそこに還元しつくされないのはなぜなのか，それを解明するのを急がねばならない。どのような民衆の手続きが（これもまた「微細」で日常的なものだが），規律のメカニズムを相手どり，それに従いながらかならずそれを反転させるのだろうか。要するに，社会政治的な秩序を編成するひそかな方式にたいし，消費者たちの側の（いや，「被支配者たちか」？）いかなる「もののやりかた」が対抗し，そのうめあわせをつけているのであろうか……こうした「もののやりかた」は，幾千もの実践をつくりなしており，そうした実践をとおして使用者たちは社会文化的な生産の技術によって組織されている空間をふたたびわがものにしようとするのである。（de Certeau 1980=1987: 17）

フーコーは『監獄の誕生』のなかで，監獄と同じく碁盤目状に編成された空間と時間にもとづく組織として，学校と教育について詳細に論じているが，だとすれば，ド・セルトーが「『監視』の碁盤目」にたいするものとして位置づけている，上の引用の「消費者」（被支配者，使用者）たちの側の「もののやりかた」（*manière de faire*）は，学校と教育のなかにも存在することになるだろう。そして，この学校のなかでの「規律のメカニズムを相手どり，それに従いながらかならずそれを反転」させているのが，ウィリスが『ハマータウンの野郎ども』で研究対象にしたイギリスの労働階級の反学校的な男子生徒たち，（ハマータウンの）「野郎ども」である。それでは，「野郎ども」の「反転」とは，どのようなものなのであろうか。そして，それはド・セルトーの議論にたいして，どのようなことを示すことになるのであろうか。システムとその反転について，ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』とド・セルトーの『日常的実践のポイエティーク』を通して考えることが，本稿の目的である。

『ハマータウンの野郎ども』の議論を知っている人には，すでにここまでで，本稿の議論の行く先はある程度見えたことだろう。『ハマータウンの野郎ども』は，階層の「再生産」の構造について明らかにしている。つまり，資本主義社会のシステムは，まさに「反転」の作用によって存続し，再生産されていることを示したのが，『ハマータウンの野郎ども』なのである。「反転」は「反転」される。システムの外に出ているつもりが，そこはシステムの内側であった。そこからどうにか抜け出そうとするウィリス自身も，自分が見つけた罠にとらわれ，罠があるとはわかっていても，それにひっかかってしまう。

ド・セルトーは，次のように指摘している。

> テクノロジーを担う技術者たちは，自分らが「抵抗」と名づけたもの，機能主義的計算（官僚主義機構の先端的形態）をかき乱すあの動きがいったい何であるのか良く承知している。かれらとて，現在の秩序が日常的な現実からすれば不自然であり，その

Akita University

> 不自然さがそこここで見え隠れしているのに気づかぬはずはない。だがかれらはそれを口にしてはならないのだ。(de Certeau 1980=1987: 390)

「口にしてはならない」のではなく，「口にする必要がない」のかもしれない。「抵抗」はなくすべきものではなく，また，なくなるものでもなく，それはシステムの存続と再生産には不可欠のものである。ただし，「抵抗」は障害，または問題として，なくすべく振る舞わないといけない，あるいは「口にする」人たちが必要かもしれない。

本稿では，この反転合戦，反転の堂々巡りを，ド・セルトーとウィリスの議論をとおして見ていく。「堂々巡り」とはいえ，反転の反転によって同じ地点に戻らないといけないわけでもない。そこにズレを見出すのかどうか，ズレの性格をどのように理解するかで，また立場がわかれることだろう。

このズレをかかえこんだ世界は，「螺旋」を描くというよりむしろ，ズレをかかえこんだ「音律」の世界に似ている。合理的なシステムとして，表面的には，きれいな円（5度圏）を描くことができたとしても，そのなかには，不協和というズレがあちこちに紛れ込んでしまっている，そうした世界に。そして，実は，そのシステムを作り上げる基準にもさまざまなものがある世界，ズレやシステムが，聞き，弾き，作り，理論化し，批判し，変わりゆく，という人びとの歴史的，社会的，日常的な実践によって生み出され続けてきた世界に[1]。

2.「使用」という「生産」

> 日常的なものは，無数の密漁法からできあがっている。　ド・セルトー

つくり出すこと，そしてつくり出されたものを消費し，受容すること。前者が創造的，主体的である（「前」に行われる）のにたいして，後者は受動的で，受け身であり（「後」にくるものであり），受け身（後塵を拝すること）は主体的であること（先駆的であること）より評価されないことがしばしばである。「創造」は，世界も人も神によって創られたというように，かつては神のみの有する力とされたこともあった。

生産と消費，創造と受容の二項対立において，前者には力（権力）があり，富や知や芸術を生み出し，社会や文化を進展させ，価値があり，有益なものとされている（にもかかわらず，男性と女性では，この価値が転倒される）。組織化され，力のある生産の側にたいして，消費する側（消費者）は弱く，したがって「保護」も必要になり，その「権利」は守られなければならない。

しかし，消費し，使用する側も，何かをつくり出しているのではないか[2]。それも，「技術的合理性の均質化のプロセス」(de Certeau 1980=1987: 42) が進展する，既成品にあふれた現代の社会において，その均質化のプロセスの間隙において，消費者たちは何かをつくりだしているのではないか。これがド・セルトーの『日常的実践のポイエティーク』の着眼点である。

> 拡張主義的で中央集権的な，合理化された生産，騒々しく，見世物的な生産にたいして，もうひとつの生産が呼応している。こちらのほうの生産は，さまざまな策略を弄しながら，あちこちに点在し，いたるところに紛れこんでいるけれども，ひっそりと声もたてず，なかば不可視のものである。なぜならそれは，固有の生産物によってみずからを表わさず，支配的な経済体制によって押しつけられたさまざまな製品をどう使いこなすかによっておのれを表わすからだ。(de Certeau 1980=1987: 14)

生産，つくり出すことに価値を見出そうという点において，このド・セルトーの視点は，生産と消費・使用の価値じたいを転倒するものではなく，消費のなかにも生産を読み取る，生産の概念，あるいは領域を拡張させるものである。ド・セルトーが問題にするのは，「消費者には創造性がないのだと考えるようにしむけてしまった」(de Certeau 1980=1987: 329)，そうした社会である。さらに，ド・セルトーは，生産と消費との関係に「支配」の関係を読みとる。ド・セルトーは，消費者を「被支配者」と言い換えてもいる。

なぜ，生産と消費の関係が，支配の関係になるのか。それは，現代の社会において生産や経済活動が，企業や国家による「拡張主義的で中央集権的な」システムを成しているためである（「市民社会」についての考え方のなかには，企業や国家は市民社会には含まれないという考え方もあるように）。そのシステムにおいてつくり出されるものは，製品だけではない。建物も都市も，情報も，さまざまな政策や計画，法や教育，医療などの制度も生産される。そうしたものの対象とされる人たち，その消費者（使用者）たちは，つくり出されたものを計画者，製作者側の考えるとおりに使用し，消費するのではない。消費はたんなる消費ではなく，生産，あるいは創造の側面があるというのがド・セルトーの議論である。

> 使用者たちは，支配的文化のエコノミーのただなかで，そのエコノミー相手に「ブリコラージュ」を

Akita University

おこない，その法則を，自分たちの利益にかない，自分たちだけの規則にしたがう法則に変えるべく，細々とした無数の変化をくわえているのではないか……うごめく蟻群にも似たこの活動……その手続き，それを支えるもの，その及ぼす効果，そしてその可能性をさぐりだす必要があるだろう。

(de Certeau 1980=1987: 16)

ド・セルトーは，こうした消費者側の生産的な消費の実践の典型的な例として，スペインに植民地化されたインディオを例としてあげている[3]。

たとえば，スペインがインディオの植民地化に成功したが，実はその「成功」がいかに両義的なものであったか，つとに明らかになっている。かれらインディオたちは，押しつけられた儀礼行為や法や表象に従い，時にはすすんでそれをうけいれながら，征服者がねらっていたものとは別のものを作りだしていたのだ。かれらはそれらを忌避したり変えたりしていたわけではなく，それらをちがった目的や機能，自分たちが逃れるべくもないそのシステムとは異質(エトランジェ)な準拠枠にもとづいた目的や機能に利用しながら，それらをくつがえしていたのである……これらのインディオたちは，かれらを外面的に「同化」する植民地のただなかにありながら，他者にとどまっていた……それは，支配体制を利用するかれらのやりかたが功を奏していたからであり，かれらに支配体制そのものを拒否するすべがあったわけではない。かれらは支配体制につき従いつつ，それをまぬがれていた。かれらの差異の力は，「消費」という手続きのなかで維持されていたのである。

(de Certeau 1980=1987: 14-5)

かれらを同化し，外面的にかれらを同化する秩序のただなかにありながら，かれらは他者のままでありつづけていた。その秩序からはなれることなく，それを横領していたのである。消費の手続きが，占領者が編成する空間そのもののなかでかれらの差異を維持しつづけていたのだ。

(de Certeau 1980=1987: 94)

インディオたちは支配体制を転覆させるのではなく，そのなかにありながら，その体制を自分たちのやり方で，「そのシステムとは異質な準拠枠」にもとづいて利用し，そのことによって「差異」を維持し続け，「征服者がねらっていたものとは別のものを作りだしていた」。ド・セルトーは，そうした実践を表わすものとして「横領」や「密猟」という表現を用いている。

支配者側の規則と監視の網の目をかいくぐり，自分たちのものではないものを，こっそりと自分たちのものにすること，そのためにさまざまな工夫を行うこと。そして，それは支配者側に表面上は従いながらも，それに「同化」することを拒むことを表わしている。「自分たち」と（支配者の）「やつら」が同じになることはないが，支配関係やその体制じたいを転覆しようとするわけでもない。

インディオたちほどではないにしても，こうしたことを，「エリート」（「テクノクラート」）による拡張主義的で合理化された中央集権的なシステム（「テクノクラシー」）が支配する社会，そして都市（「メガロポリス」）のなかで，一般の人たち（「民衆」）は行っているのではないか。このことを明らかにすることがド・セルトーの『日常的実践のポイエティーク』での狙いである。

これほどまでではないにしろ，われわれの社会でも，言語の生産者である「エリート」が押しつけ普及する文化を「民衆」層の人びとが使用するとき，似たような両義性が紛れこんでいる。

(de Certeau 1980=1987: 15)

テクノクラシーによってこのシステムが拡大すればするほど，主体のになう役割は小さくなってゆく……個人は，この広大な枠組みのなかにますます拘束されてゆき，しかも主体的なかかわりを失ってゆくいっぽうであり，そこからきりはなされていながら抜けでることもできず，個人に残されているのはただ，このシステムを相手どって狡智をめぐらし，なんらかの「業(フェール)をやってのける(デク)」こと，エレクトロニクスと情報におおいつくされたメガロポリスのただなかで，いにしえの狩猟民や農耕民たちが身につけていた「術策(アール)」をみつけだすことである。

(de Certeau 1980=1987: 34-5)

数々のテクノクラシーの構造の内部に宿って繁殖し，日常性の「細部」にかかわる多数の「戦術」を駆使してその構造の働きかたをそらしてしまうような，なかば微生物にも似たもろもろの操作を明るみにだすことが問題。(de Certeau 1980=1987: 17-8)

この最後の引用に使われている表現からもわかるかもしれないが，ド・セルトーのこうした視点は，すでに述べたが，フーコーの『監獄の誕生』での「細部」にかかわる規律の空間（微視的権力）についての議論への批判が込められている。ド・セルトーは，みずからの視点が

Akita University

フーコーとは「逆」のものと説明している。

〔フーコーとは〕逆だというのは，秩序の暴力がいかにして規律化のテクノロジーに変化してゆくかをあきらかにするのはもはや問題ではなく，さまざまな集団や個人が，これからも「監視」の編み目のなかにとらわれつづけながら，そこで発揮する創造性，そこここに散らばり，戦術的で，ブリコラージュにたけたその創造性がいったいいかなる隠密形態をとっているのか，それをほりおこすことが問題だからだ。消費者たちが発揮するこうした策略と手続きは，ついには反規律（アンチ・ディシプリン）の網の目を形成してゆく。

（de Certeau 1980=1987: 18，括弧内引用者）

規律の空間を生産する装置にたいし，この規律を身をもって演じる（その規律を相手どる）側の人びとは，いったいどのような空間の実践をおこなっているのだろうか……生きられた空間の理論へ。

（de Certeau 1980=1987: 208）

拡張し続ける規律の合理的な空間（と時間）のなかで，「主体のになう役割は小さくなってゆく」ばかりだが，しかし，計画された空間（と時間）のなかで，身をもって演じられ，繰り広げられる「実践」には，予期できないような「創造性」があるのではないか。「人」のいない，冷たい「死んだ空間」ではなく，このような実践をとらえる「生きられた空間の理論」を作りあげることが，ド・セルトーの目指すところである[4]。

こうしたド・セルトーの視点は，ポール・ウィリス（そしてカルチュラル・スタディーズの諸研究）の視点と重なり合っている点がある。ウィリスは反学校的な，反抗的な生徒たちである「野郎ども」の服装について，次のように指摘している。

学校を越えた若者文化の世界が商業ベースにのりながらも，反抗的な生徒たちのスタイル選好に影響を及ぼしている事実は重く見ておくべきだろう。商業主義によって一定の意味をあらかじめ与えられたスタイルが，〈野郎ども〉の手許で彼ら固有のもっと具体的な意味づけを加えられて利用されているのである。この種の風俗は，それと結びついた流行の音楽ともども，あきらかに利潤めあての商魂に端を発していることが多いし，それを追い求める若者たちの真情がつねに忠実に反映されているわけでもない。それは確かにそうだ。しかし他面では，若者たちによって取りあげられみずからのものとして使いこなされるときには，それが商業主義の動機からは予測しえなかった若者たち自身の素直な自己表現の媒体になりうることも見落とすべきではないのである。（Willis 1977/1981 =〔1985〕1995: 47-8）

若者たちは，資本主義経済において利潤を目的に生産された既成品，画一化された商品を消費する。工場で大量に作られた服を店で買って着る。この行動は，作られたものを受け入れるだけであり，着こなしに工夫の余地があるとはいえ（着こなしにも流行というルールはあるが），そこに創造性といったものはほとんどないようにも見える。着こなしに独創性という表現が使われる場合はあっても，創造性という表現が使われることはめったにないであろう。創造性は，そのデザインや流行の「もと」となるものをつくり出すデザイナーにのみ属するもののようにも見える。しかし，それが若者たちによって「みずからのものとして使いこなされるとき」，そこには「予測しえなかった」ものが生み出され，それは若者たちの「自己表現の媒体」にもなりうる。そして，若者たちの日常的な実践のなかで用いられるとき，それは特別な意味を持つものにもなる。

服装の乱れは，学校で好ましものとされず，学校の規則に反することもあるが，売っているものを買っただけの服装は，それを着る場や着こなしによっては，学校と権威への抵抗を意味するもの，そして学校に従わない「自分たち」のアイデンティティを形づくることにもなる。服装をめぐる規律と規則とその違反という「いたちごっこ」は，まさにド・セルトーのいう「消費の手続き」をなしている。その違反はあからさまなものから，見つからない，生徒どうしにしかわからない，仲間だけにしかわからないようなわずかなものまで，さまざまである。そして，学校におけるこの規律と規則とその違反は，服装以外のさまざまな場面で見られる。

ウィリスが描き出す，学校と先生という権威にたいして反抗的な生徒たちは，ド・セルトーがとらえたいと考えている実践，「生きられた空間」の例を数多く提供してくれる。ド・セルトーは，わざわざインディオをひっぱり出して来なくても，より身近なところに，反抗的な生徒たちの実践という「消費の手続き」の典型となるような例が存在していたともいえるだろう。反抗的な生徒たちは，いうまでもなくイギリスにしかいないというものではない。

ウィリスは学校と反抗的な生徒たちとの関係を「フォーマル」と「インフォーマル」の関係としてとらえている[5]。「フォーマル」なものは，「エリート」（「テクノクラート」）による拡張主義的で合理化された中央集権的システムによって支配されている。

Akita University

> 学校はすぐれてフォーマルなもので成り立つ世界だ。学校には画然とした構造がある。独特な建築様式があり，校内規則があり，教育上の慣行がある。教職員のあいだには位階制度があり，その権限は……行きつくところは国家によって，威厳をつくした法律によって，国家に属する抑圧装置としての警察によって，正統性を保障されている。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 60)

制度や規則，そしてカリキュラム，時間割だけでなく，その建物（建築様式）じたいも，「フォーマル」なものになっている。規律と主体の形成における建築様式（空間の編成）の重要性は，フーコーの『監獄の誕生』のまさに焦点になっているといえるものである。

ド・セルトーは，上で引用したように，「テクノクラシーによってこのシステムが拡大すればするほど，主体のになう役割は小さくなってゆく……個人は，この広大な枠組みのなかにますます拘束されてゆき，しかも主体的なかかわりを失ってゆくいっぽうであり，そこからきりはなされていながら抜けでることもできず，個人に残されているのはただ，このシステムを相手どって狡智をめぐらし……なんらかの『業をやってのける』こと」(de Certeau 1980=1987: 34-5) と述べていたが，ウィリスは学校について次のように指摘している。「好ましい学校教育の伝統は，教育を受ける者に私的な領分の余地を残さないことを旨とする……どの学校でも低学年の生徒たちは実にやすやすとかけがえのない私的な領域を明け渡してしまうものだ」(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 166)。

しかし，この学校のシステムと先生を相手どって「狡智」をめぐらすような子どもたち，私的な領域を明け渡すことを拒否し，「業をやってのける」子どもたちも存在する。その典型が反学校的な生徒たちであり，それは「フォーマル」にたいする「インフォーマル」なものによって成り立つ。

> 反学校文化はインフォーマルなもので成り立つ世界である。そこでは，フォーマルなものからのゆきすぎた要求は拒絶される……一般に労働階級の文化においては，インフォーマルな世界に立てこもることでいかにもしたたかな抵抗を持続させることがよくある。その戦術の特徴は，まさにぎりぎりのところで上手に身をかわし，それでいて「規則＝支配」をかいくぐっているところにある。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 61)

「したたかな抵抗」，ぎりぎりのところでの身のかわし，規則＝規律をかいくぐること，いずれもド・セルトーが重視しているものである。そして，以下で論じるように，ド・セルトーはそうしたものを「戦術」という言葉で，「戦略」との対比でとらえている。

ところで，教育についての議論や研究において，あまり取りあげられることはないようだが，ド・セルトーは『日常的実践のポイエティーク』で教育についても数か所で論じており，教育における「消費」の誤った考え方について次のように指摘している。

> 人びとの精神を啓発し魂を高揚させるためには，自分たちの文化モデルが必要なのだと信じきって，三流新聞やテレビの「レベルの低さ」に心を痛めているエリートたちは，大衆が，押しつけられる生産物によって成型されるのだと思いこんでいるのだ。まさにそれこそ「消費する」という行為を取り違えることである。「吸収する」ということはかならず摂りいれたものと「似たものになる」ことだとみなされており，それを現在ある自分と「似たものにする」こと，それを自分のものとし，わがものとする，またはわがものとし直すこととはみなされていない。(de Certeau 1980=1987: 326-7)

吸収することが「わがものとし直すこと」というとらえ方は，メディアとオーディエンスの研究では一般的なものにもなっているが，テレビ番組の「低俗化」などについての議論では，「吸収すること」＝「採りいれたものと似たものになること」というとらえ方が今でもしばしばなされることがある。さらに，マス・メディアについての議論で，こうしたとらえ方にたいして批判がなされる場合にも，それでは，その批判の視点と教育とのかかわりについて議論されることは，どれほどあるのだろうか。教育のなかでは，「吸収すること」＝「採りいれたものと似たものになること」というとらえ方の方が中心をなしているとも言える。「吸収すること」＝「採りいれたものと似たものになること」にならない子どもたちが，反抗的ととらえられたり，落ちこぼれとしてとらえられることになる。消費において，創造性など求められていない，そのようなものは認められない，存在しないかのように。

ド・セルトーは，ここには次のような「教育の神話」があったと論じている。

> 18世紀に啓蒙主義思想が望んだのは，書物によって社会を改革（レフォルメ）〔再成形〕しようということであり，学校教育をとおして書物を普及させ，風俗や生活習慣を変えようということであった。こうしてエリー

Akita University

トたちがその生産物をあまねく国中に伝えれば，エリートは国民全体を改造する力をもつだろうと期待されたのである。

（de Certeau 1980=1987: 327，括弧内訳者）

教育では今でも書物＝活字が中心になっており（書物＝マンガや雑誌にはならない），活字の読み書きの能力が基本になっているが[6]，その内容＝生産物は「エリート」たちのものである。その内容[7]も言葉づかいも「フォーマル」なものであり，「エリート」による拡張主義的で合理化された中央集権的システムによって支配されている。ド・セルトーは次のようにも言っている。

活力ある生産は，活力なき消費がともなっている。このような生産は，受容器としての消費というイデオロギーをうみだす。（de Certeau 1980=1987: 329）。

現在の支配体制はこうした無数の生産〔としての消費〕のささえになっているのである。にもかかわらず体制の所有者のほうはと言えば，そうした創造性にはまるで盲目になっているのが現状だ。

（de Certeau 1980=1987: 31，括弧内引用者）。

次に活字の消費としての「読むこと」，そして都市の消費（使いこなすこと）としての「歩くこと」についてのド・セルトーの議論について見ていくが，この箇所の終わりに，都市について指摘したものではあるが，ド・セルトーの言葉をあげておく。これも学校や教育についてもあてはまるものとして読むこともできるだろう。指定された場所において，計画どおりにすべてを進めること，都市以上にこのことが求められるのが学校であろう。一つ狂うと，それがすべての運行に影響を及ぼす可能性がある。したがって，不測の出来事は排除されなければならない。

不測の出来事を排除したり，あってはならぬ事故とか，合理性の破壊者とかみなして，計算外に追いやってしまうのは，都市の生きた「神話的」実践の可能性をとざしてしまうことにひとしい。そうなれば都市に住む人びとに残されたものは，ただ，他者の権力によってつくられ，こしらえものの事件で捏造されたプログラミングのスクラップでしかなくなってしまうだろう。（de Certeau 1980=1987: 396）

3．「読むこと」「歩くこと」「語ること」

ある表象（説教家とか教育者とか，文化の普及者たちが社会経済的な昇進の規範として教えこむもの）が存在し流通しているからといって，それを使用している者たちにとってその表象がいったい何であるのかということは少しもわかっていない。そうした表象の製造者ではないが実際にそれを使っている人びとがどのようにそれに手をくわえているか，それを分析する仕事がのこっている。それをあきらかにしてはじめて，イメージの生産とそのイメージを使用するプロセスとのあいだにどのような隔たりがあり類似があるのかを理解することができるだろう。（de Certeau 1980=1987: 15）

「吸収すること」＝「採りいれたものと似たものになること」，という消費の図式が成り立つ場合には，採りいれられるものとしての「表象」，「イメージの生産」のみを理解し，考慮しさえすればいいことになるが，「吸収すること」＝「わがものとし直すこと」，である場合，採りいれられるものが，どのように使用され，どのように手を加えられているのかを理解する必要がある。ド・セルトーは，この生産的な消費の過程，多種多様な「実践」は，「話すという行為」（発話行為）を「理論的指標」として考えることができるとし，「発話行為，それがわれわれの研究の主眼」（de Certeau 1980=1987: 15）とも述べている。

理論的指標として，文の組みたてといったものを参考にできるかもしれない。世にひろく認められている語彙と統語論をもちいてどのように自分なりの文を組みたてあげるか……言語学において，「言語運用」と「言語能力」とはおなじものではない。話すという行為（アクト・ド・パルレ）（そしてそこにふくまれる発話の戦術のすべて）は，言語の知識に還元しつくせるものではないからである。（de Certeau 1980=1987: 15）

実際の状況のなかでの話すという行為，そして話しの戦術は，語彙にも文法にも，あるいは言語の知識に還元することもできない。「フォーマル」な言語の知識が「インフォーマル」な言語の実際の場と人間関係での使用と異なるように。

さらに，ド・セルトーは，「話す」という主体的な要素，創意を含む言語使用の次元だけではなく，いっそう受動的で，「消費」するという面の強い「読む」という行為にも焦点をあてている。「発話行為」よりむしろ「読む」

Akita University

という行為の方が，ド・セルトーの「消費」という実践の価値を掘りおこそうとする議論においては，より中心となるべき問題であろう。ド・セルトーは「読む」という消費の行為について次のように述べている。

> 読むという活動は，ことば無き沈黙の生産にそなわるありとあらゆる特徴をしめしている。その時ひとは，ページをよこぎって漂流し，旅をする目はおもむくままにテクストを変貌させ，ふとしたことばに誘われては，はたとある意味を思いうかべたり，なにか別の意味があるのではと思ってみたり，書かれた空間をところどころまたぎ越えては，つかの間の舞踏をおどる……読者は蓄積するのに慣れていないから……かれにできることはただ，読むのに「消えてしまった」時間の代用品（痕跡か約束）にすぎぬもの（本やイメージ）を買うことだけである。読者は，他者のテクストのなかに，快楽の策略，乗っ取りの策略をそっとはりめぐらすのだ。そこでかれは密猟をはたらき……複数の自分になる。策略，メタファー，組み合わせ，こうした生産はまた，記憶の「制作（アンヴァンシオン）」でもある。それは，さまざまなことばを使って，封じこめられた沈黙の歴史に出口をあたえてやるのである。読みうるものは，記憶しうるものに変わる。(de Certeau 1980=1987: 29-30)

「自分たちだけの差異の数々」(de Certeau 1980=1987: 31)。読者は，本を購入するなどして「自分のもの」にし，手にいれる理由もさまざまで，読むこともあれば，読まないことも，全部読むこともあれば，部分的にしか読まないこともあり，好き勝手な使い方をする。本は，本として使われるかどうかもわからない。文章にしろ，写真やイラストにしろ，ひとつひとつの言葉にしろ，さまざまな思い出や記憶，想像や空想と結びつけられる。理解にしても，内容の記憶にしても，好き勝手なものになるだろう。その記憶がどれほど残るかもわからないが，支流のような記憶は，さまざまな支流とあわさり，次の経験の支流へと流れて込んでいく。

このような読む行為（読書行為）のなかに，「アンヴァンシオン（invention)」があるとド・セルトーは考えている。「制作」と訳されている「アンヴァンシオン」（インヴェンション）には，「発明」「創意」「工夫」「作り話」「でっちあげ」「独創性」などの意味があり，その形容詞形「アンヴァンティフ（inventif)」には，「創意に富む」「抜け目ない」「機略に富む」などの意味がある。読む行為のなかには，ド・セルトーが「消費」という実践に込めたい意味がすべて入っているともいえる。「読むことは『技芸（アール）』をみちびきだすのであり，これは受動性とはちがったものである」(de Certeau 1980=1987: 31)。

ド・セルトーは，この読む行為を，場所との関係で論じており，これは以下でとりあげるド・セルトーの「戦略」と「戦術」の区別に結びついている。ド・セルトーは，読むとは，「空間のゲーム」であり，「作者の場所のなかに，別の世界（読者の世界）が入りこんでゆく」ものだと述べている（de Certeau 1980=1987: 30)。また，作者を定住者あるいは領主，読者を旅人あるいは遊牧民にたとえている。

> 作者たちは固有の場の創立者であり，古来からの勤労を引き継いで言語という土壌を耕す後継者であり，井戸を掘り家を建てる者たちだが，そんな作家たちからはるかに遠く，読者たちは旅人である……他者の土地を駆けめぐるかれらは，自分で書いたのではない領野で密猟をはたらく遊牧民……読むことは場所をもたない。(de Certeau 1980=1987: 340-2)

支配する，あるいは教育する側は，読者（子どもたち），旅人や遊牧民の自由な行為を規制しようとする。読む行為には正しい理解や解釈，正解，歩むべき正しい道が設定され，移動にたいしては，国境や土地の所有権，計画された道路と建物，交通機関，法などにより，入っていい場所と歩いていい場所などが決められる。移動の規制や規律は，学校でも重要である。学校でも「遊牧民」であることは認められないであろう。

> テクノクラシーによって書かれ，築きあげられた機能主義的空間を行き来しながら，かれら消費者たちの描いてゆく軌跡は，思いもかけぬ文をつくりだし，ところどころ判読不可能な「難文（トラヴェルス）」をつくりあげてゆく……それらはシステムのなかでどんどん増えていっているのに，システムのほうは，いったいそれが何なのか，規定することもできなければ，捕捉することもできないでいる。
>
> (de Certeau 1980=1987: 24)

読者の読むという行為，都市を横断（travers）していく人たち，つまり消費者たちは，読むことができず，読まれるかどうかもわからないが，「思いもかけぬ文」をつくりだしている。いや，「文」になっているかどうかすらわからない動きを作り出していく。

ド・セルトーの『日常的実践のポイエティーク』でもっともよく言及され，引用されるのは，おそらく，「都市を歩く」というタイトルのついた第7章の，「世界貿易センター」からの都市の眺望と都市のなかを歩く人びとについて論じた箇所であろう。

Akita University

> 世界貿易センターの最上階にはこばれること，それは都市を支配する高みへとはこばれることだ……この高みにのぼる者は，大衆からぬけだすのだ……こうして空に飛翔するとき，ひとは見る者へと変貌するのだ。下界を一望するはるかな高みに座すのである……眼下にひろがるテクスト……こうしてひとは世界を読みうる者……神のまなざしの持ち主となる……街を見おさめようとする意志は，その意志をかなえる手段ができる以前から存在していた。中世やルネッサンスの画家たちは，いまだかつて存在したこともないような目が見はるかした都市の姿を描いていた……都市の錯綜を読みうるものに変え，変転たえまないその不透明性を動かぬ透明なテクストに変えてしまっている……パノラマ的な都市とは，「理論的な」（すなわち視覚的な）シミュラークル，要するに，実践を忘れ無視してはじめてできあがる一幅の絵なのである……見る者という神……この神は，さぞかし人びとの日々の暮らしの複雑なもつれあいなどあずかりしらず，そんなことには縁（エトランジェ）なき存在であるにちがいない。
>
> （de Certeau 1980=1987: 200-2）

こうした上からの神の視点，「理論的な」視点の下に広がる，上から見える「テクスト」のような風景の下にあり，屋根や建物にさえぎられ，また小さすぎて見えない世界には，また別の，現実の日常の世界が広がっている。

> そうした神をよそに，都市の日常的な営みは，「下のほう」（down），可視性がそこでとだえてしまうところから始まる……こうした日々の営みの基本形態，それは，歩く者たち（Wandersmänner）であり，かれら歩行者たちの身体は，自分が読めないままに書きつづっている都市という「テクスト」の活字の太さ細さに沿って動いてゆく。こうして歩いている者たちは，見ることのできない空間を利用しているのである……読みえないもの……すべては，あたかも盲目性が，都市に住む人びとの実践の特徴をなしているかのようだ……もはやこの都市はプログラム化され制御された操作の領域ではない……読みうるようなアイデンティティももたず，とらえようにもつかみどころがなく，理性の透明性ももたないさまざまな力——管理不可能な力がいたるところにひしめきあっているのである。
>
> （de Certeau 1980=1987: 202-6）

ド・セルトーは，こうした日常の都市を「移動する都市」と呼び，「歩く行為（アクト・ド・マルシェ）の都市システムにたいする関係は，発話行為（speech act）が言語（ラング）や言い終えられた発話にたいする関係にひとしい」（de Certeau 1980=1987: 210）とし，「わたしは，視覚的，一望監視的，ないしは理論的な構築につきものの『幾何学的』，『地理学的』空間とは異質な実践（エトランジェ）をとりだしてみたいと思う」（de Certeau 1980=1987: 203）と述べている。

ド・セルトーは，上からの視点を「エリート」「テクノクラート」による視点ととらえており，それにたいして，絶えず移動する人びとの歩み，日常的実践を位置づけている。こうした説明は，ド・セルトーの都市についての議論が取りあげられるときにも基本的なとらえ方になっている。しかし，この高所からの眺めについての議論に，「読む行為」についてのド・セルトーの議論を重ね合わせるとどのようになるのであろうか。

上から都市を眺めたとき，都市は「眼下にひろがるテクスト」に変貌する。それは，ちょうど本を広げたときの状態と同じである。本を広げたとき，眼下にはテクストがひろがる。そうすると，都市をながめる視点は，読む行為と同じく，都市を消費する視点となる。眼下にひろがる都市に何を読みとるのか，何を見るのか，そこにどんな記憶や想像を重ね合わせるのか。読む行為と同じく，この見る行為もまた，「アンヴァンシオン」であり，生産的な消費の実践である。

都市を「見る」場合，都市のなかで建物と人に囲まれ，都市の全体を見通せないまま見る（読む）のか，あるいはそれを都市の上から眺望するという視点から見るのか（読むのか）という，視点の位置の違いがある。都市のなかを歩き，生活するとき，自分の位置をある程度把握しておく必要はあるかもしれないが，都市の全体を見渡し，把握している必要は必ずしもない（これは社会全体などについてもあてはまる。誰も全体を見通すことができないし，見通さなくても生きていくことができる）。また，都市のなかを歩いている人が，何かの機会に都市を眺望できる高い場所に行ったとき，その人は必ずしも都市の「全体」を見るわけでもない（高所恐怖症の人は，見ることのできる状況にあっても見ないかもしれない）。それは，本を読む人が，どんな読み方をするのか，読むかどうかもわからないのと同じである。

「上から」の視線と「下から」の視線という二項対立的な考え方とともに，それを説明するための，「世界貿易センター」の例はわかりやすいものではあるが，それは「生産」（作者）と生産的な「消費」（読者）の違いにかかわる問題をあいまいにしてしまう。

都市を上から眺めたところで，その人は作者になるわけではない。上から眺めることで，眼下の景色が「自分のもの」になったかのような錯覚が生じるかもしれない

Akita University

が，それは本を所有した読者も同じである。本は自分のものである。ただし，自分で書いたものではない。自分で作ったものでもない（「作者」自身も本を自分では作らない）。活字の上空を飛翔することによって，読者は作者にはならない。しかし，作者も読者になることもあるだろう。

ロジェ・シャルチエは，『書物の秩序』の「読者共同体――ミシェル・ド・セルトーを偲んで」のなかで，読書について次のように指摘している。

> 読書はいつも所作，空間，習慣のうちに具現化するものであると見なす必要がある……読書能力の間に存在している対比。読み書きできる者とそうでない者との境界はきわめて重要である……テクストを読める者がみな，同じように読むわけではなく，読書の達人である教養人士と最も未熟な読者との間の差は著しい……同一の知的用具を持たず，書かれたものに対して同一の関係を保たない読者により，テクストの読み方が異なる。(Chartier 1992=1996: 23)

「上から」見るときの，眼下に広がるテクストの読み方は読者によって異なる。さらに，そこに実際にアクセスできるのか，手にとるのかどうかという問題もある。本は，書店で売られており，お金を出せば「誰でも」買える状態になっている。しかし，書店に「入れる」のか，「入ろう」と思うのか。本にお金を出そうと思うのか，出せるのか。高所からの眺めであろうと商品であろうと，「消費」の側面を考えるとき，こうした点も考える必要がある。「民衆」はすべて「同じ」というわけではない。区別することなく，同じものとしてとらえる視点は，まさに「上から」の視点である（区別することもまた，「上からの」視点である。ただし，この「上から」という表現に問題がある。都市のなかの実践でも，さまざまな区別が行われている）。

この高所からの都市の眺めについての議論は，次の箇所でとりあげるド・セルトーの「戦略」と「戦術」の違いと合わせて考える必要がある。これは，「プログラム化され制御された操作の領域」として都市を形づくる側と，それを消費する側との違いである。「おのれが，世界を見るこの一点にのみあるということ，まさにそれが知の虚構（フィクション）なのである」(de Certeau 1980=1987: 201)。

「知の虚構」を手に入れるのかどうか，それを作り上げられるのかどうかは，実際に都市を眺望するかどうかにかかわらない。「知の虚構」を作るためには，実際に高い所に登る必要もないであろう。都市で高いところに登りたがるのは，観光客などの消費者なのかもしれない。「知の虚構」は，いわばそれとは異質な（エトランジェ）ところで作られる。

ド・セルトーは，「知」（のディスクール）と一般の人たち（「凡人」）との関係について，フロイトを例に次のように述べている。

> それでもなお凡人は，なにか抽象的普遍にも似たすがたをとりながら，その及ぼす力によってそれとわかるような，ある神の役割をはなしている。つまり凡人は，〔フロイトの〕ディスクールにたいして，ある特殊な知を一般化する手段をあたえ，話の全体をとおして，そのディスクールの効力を保障する手段をあたえてやっているのだ。凡人の権威をかりて，ディスクールはみずからの限界をのりこえる……凡人のおかげでディスクールはその差異を保証され（「見識ある」ディスクールはやはり「並み（コモン）の」ディスクールとはちがう），同時にその普遍性を保証される（見識あるディスクールは共通（コモン）の経験を語り，解明する）……凡人あればこそディスクールは，「これは万人の真理である」と言い，「これは歴史の真実である」と言えるのだ。そこで凡人はかつての神のようなはたらきをしている。
>
> (de Certeau 1980=1987: 45-6，括弧内訳者)

一般化する，全体を見渡す視点も神のものであり，またそれを支え，その普遍性を保障する「凡人」という抽象的普遍も神のようなものはたらきをしている[(8)]。こうした抽象的普遍化の，一方の側からの疑似－相互参照的な関係から抜け落ちてしまうもの，それがド・セルトーがとらえようとしている日常的実践であろう。つまり，それは，繰り返しになるが，眺望するのかどうか，というだけの問題ではない。

「読むこと」「歩くこと」（そして，ここに「見ること」も加えるべきであろう）とともに，ド・セルトーが生産的な消費の実践と考えているものに，「語ること」がある。

> 語りの構造は空間の統辞論という価値をそなえている……さまざまな場所を線状に系列化したり，交錯させたりしているのだ。たとえばここ（パリ）からあそこ（モンタルジ）に行くとか，この場所（部屋）は別の場所（夢や思い出）をふくんでいる，等々といったように……どんな物語も旅の物語――つまり空間の実践である……空間とは実践された場所のことである。たとえば都市計画によって幾何学的にできあがった都市は，そこを歩く者たちによって空間に転換させられてしまう。おなじように読むという行為も，記号のシステムがつくりだした場所――書かれたもの――を実践化することによって空間を

Akita University

うみだすのである。(de Certeau 1980=1987: 239-43)

さまざまな場所をつなぎあわせる「語り」も，計画的につくられた「場所」(の関係) から離れ，その人の視点からさまざまな物語が紡ぎだされる，「生きられた空間」をつくりだす。このような旅，移動としての語りの性格について指摘しながら，ド・セルトーは物語性の問題，つまり生産的な消費についての問題を指摘している。

> もし仮に違反的なものがみずから身をずらしながらしか存在せず，周縁にではなくコードの間隙に生きながらその裏をかき，それをずらしてゆくという特性をそなえており，状態にたいして移動を優先させるという特徴をそなえているとするなら，物語は違反的なものである……残された問題は，いうまでもなく，このような違反的な性格をもった物語性が実際に社会にどのような変化をもたらしてゆくのか，ということであろう。
>
> (de Certeau 1980=1987: 263-4)

「違反的な性格をもった物語性」，つまり人びとの消費の実践が，「実際に社会にどのような変化をもたらしてゆくのか」，この点がウィリスにとっても重要な問題になっている。

ド・セルトーは，読むという行為を創造的な消費の例としていたが，ウィリスが研究対象にした反抗的な生徒たちは，読む行為（その他の行為にも）に規律を課そうとする学校教育に，そしてそこで中心をなす「フォーマル」な言語（の使用と学習）への拒否反応を示している[9]。そして，こうした言語の拒否は，労働階級の「文化」をなしている。

> 学校教育に対する反撥は，どのような場合でも言語に対する拒否反応を含みもっており……少年たちの場合は，言語をもっぱら知的生活者のための表現手段として見下していたのである……言語の支配との闘争こそが労働階級にとっての文化が実存する仕方なのだ。(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 302)

読むという行為，多くの場合，「フォーマル」な言語を読む，あるいは使用するという消費の行為は，「学校教育」という場においてはもちろん，そこを離れても，特定の消費者（「知的生活者」など）と結びついている。エリート＝生産，民衆＝消費（生産的な消費），という単純な対立図式では，こうした状況をとらえることはできない。

「エリート」による拡張主義的な中央集権的システムへの抵抗は，それが提供するものの使用法，消費の仕方を工夫する（「ブリコラージュ」をする）ということ以外にも，それを拒否するというやり方もある。本や教科書は，そんなものは「自分たちのもの」ではない，（自分たちには）「役に立たない」，読まないという「使用法」もある。また，当然，「読む」対象は，活字，書籍だけではない。つまり消費という「行為」だけでなく，消費の「対象」も日常的実践において，合理化されたシステムとそれへの抵抗という問題を考える場合は重要になる。ド・セルトーは，「何の」消費か，という点については重視していないようである。

フォーマルなシステムを自分たちなりの仕方で「読みかえる」活動について，ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』は多くの例を提供してくれる。というより，その「読みかえ」の活動によって，労働階級が「再生産」されてしまう構造を明らかにしているのが，『ハマータウンの野郎ども』なのである。

フォーマルなシステムのなかにいては「見えないもの」がある。都市を高い場所から，「上から」見ていたのでは，見えない現実がある。それを街のなかを行き交うインフォーマルな集団は「見せて」くれる。

> インフォーマルな集団に加わると，ひとは人生の見えない裏側を感知するようになる。たてまえの世界の背後にもうひとつの世界が開けてくるのである。つまり，一方の目で公(おおやけ)の仕組みと機能を見てとり，もう一方の目で裏面に暗示されたままのものを，そしてその現実の作用を見通すという，いわば二重透視の能力を身につけるようになる。「世故にたける」とは，そういうことであり，「ものごとが現実にどのように運ぶか」を会得することである。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 68)

「上から」の視点では，「公の仕組み」の日常生活のなかでの現実の姿（「裏側」）は見えない。「全体」を見わたすことはできないかもしれないが，現実を理解できる（そう思い込める）。「エリート」（テクノクラート）には，現実が見えていない，わかっていない，という考え方も，こうしたところから出てくるのだろう。反学校的な生徒たちは，先生たちより「世の中」のことをわかっていると思っている。「よく見える」のは，「上から」なのであろうか，「下から」なのであろうか。

ウィリスは「フォーマル」なものを「読みかえる」過程を「異化」と呼んでいる。ド・セルトーが消費，実践の問題として明らかにしたいのは，この「異化」の過程とその「創造性」である。

Akita University

> 制度の理念的枠組みにもとづいて公認された特定の交換関係が，労働階級の利害や感情や価値観にひきよせて解釈し直され，公認のものとは別の関係に読みかえられる過程，それが私の言う異化である。異化の力学は制度内部の敵対関係を支点として展開する。(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 159)

この異化の過程によって，「よそよそしい力が支配する状況を自分たちの論理でとらえかえす……労働者や〈野郎ども〉の論理による環境の読みかえ」(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 132) が行われる。ド・セルトーのインディオの例は，まさにこの異化の過程を説明したものである。この異化という読みかえは，立場によって違ったものとしてとらえられる（読みとられる）。

> ともあれ異化は，それをおし進める人びとにとっては，制度が与える出来あいの役割から自己とその未来を批判的にわかつ体験的学習の過程であり，他方で制度を代表する人びとにとっては，さしあたり説明不可能な障害や抵抗や対立の存在を思い知る過程である。(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 160)

それでは，「このような違反的な性格をもった物語性」，あるいは「読みかえ」が「実際に社会にどのような変化をもたらしてゆくのか」。はじめに述べたように，『ハマータウンの野郎ども』の議論を知っている人には，この結果がどのようなものかわかっているであろうが，この点は本稿の後半でとりあげる。

ところで，「プログラム化され制御された操作の領域」から逸脱する「歩く行為」についても，『ハマータウンの野郎ども』にはさまざまな例が紹介されている。

「学校空間を学校建築が秩序だてるように，学校時間を支配するのは教科要綱（シラバス）である」(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 75) といったように，学校では建物だけでなく，時間も計画的に緻密に編成されている。したがって，学校では，「どの生徒がどの時間にどこにいるかも，理論上は言いあてることができる」(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 75)。これは，どの時間にどの教室で，何の授業を受けているのかわかる，というだけでなく，その生徒の学年は何年で，各教科の到達すべき内容の達成度（成績）はどれくらいなのか，といった時間的＝能力的な発展の段階も含まれるだろうし，さらには身体的な発達や道徳的発達，態度や行動など発達の段階も入るだろう。しかし，学校に反抗的な生徒たちは，どの時間にどこにいるのかわからない，という事態が生じる。

> ただし，〈野郎ども〉が相手ではそうはうまくいきそうもない。もし〈野郎ども〉の所在を知りたいのなら，彼ら自身の時間感覚と行動の型を知っているほうがより確実だろう。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 75)

授業に出なかったり，授業の途中で抜け出し，ふらふらと歩きまわる，学校の「遊牧民」のような生徒たち（実際に学校「間」を渡り歩くこともあるだろう）は，決められた時間にいるべき場所にいないため，その所在をつかむことができない。いるはずの場所にいないし，いてはならない場所にいたりする。「プログラム化され制御された操作の領域」，そうした生徒たちは，拡張主義的で合理化された中央集権的システムのなかの場所と時間を，自分たちの論理で「消費」している。その生徒たちにとって，「学校のたてまえの裏をかいて自律的にふるまうことはまた，学校が重視する時間の観念への挑戦でもある」(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 74-5)。

ド・セルトーがこうした生徒たちの行動に，何らかの「アンヴァンシオン」（の可能性）を見出すかどうかわからないが，こうした「プログラム化され制御された操作の領域」の内側で，それとは反するような「消費」の行為をとらえるためには，ド・セルトーの有名な「戦略」と「戦術」の区別が有益である。この区別によって，上から都市を見るという経験が，見る立場によって違うものになるということがより明確になる。同じ「場」に立ったとしても，そこから見るもの，見える光景が違ったものになる。その違いをもたらすものの一つが，「戦略」という視点に立っているのか，「戦術」という実践にあるのか，の違いである（「一つ」とするのは，それ以外の違いもあるからである）。

4．「戦略」と「戦術」

ド・セルトーのいう「戦略」とは，「エリート」による拡張主義的で合理化された中央集権的システムの視点であり，それにたいする「戦術」は，そうしたシステムのなかでの人びとの実践を指している。「戦略」についてド・セルトーは次のように説明している。

> わたしが戦略とよぶのは，ある意志と権力の主体（企業，軍隊，都市，学術制度など）が，周囲から独立してはじめて可能になる力関係の計算（または操作（マニピュラシオン））のことである。こうした戦略が前提にしているのは，自分のもの〔固有のもの〕として境界線をひくことができ，標的とか脅威とかいった外部（客や競争相手，敵，都市周辺の田舎，研究の目的や対

Akita University

象，等々）との関係を管理するための基地にできるような，ある一定の場所である……すべての「戦略的な」合理化というものは，まずはじめに，「周囲」から「自分のもの（プロープル）」を，すなわち自分の権力と意志の場所をとりだして区別してかかる。言うなればそれはデカルト的な身ぶりである。

（de Certeau 1980=1987: 100，括弧内訳者）

戦略は，おのれに固有のものとして境界線をひけるような一定の場所を前提しており，それゆえ，はっきり敵とわかっているもの（競争相手，敵方，客，研究の「目標」ないし「対象」）にたいするさまざまな関係を管理できるような場所を前提にしている。政治的，経済的，科学的な合理性というのは，このような戦略モデルのうえに成りたっている。

（de Certeau 1980=1987: 25-6）

「戦略」は，自らの「場所」を確保（確立）し，自分とは異なるものとしての相手（他者）を，合理的な空間（碁盤目状の空間）の特定の場に位置づけ，分類し，計算可能なもの，管理可能なものにする。さらに，ド・セルトーは，「戦略」がもたらす「帰結」として，以下のような点をあげている[10]。

(1)「固有のもの」とは，時間にたいする場所の勝利である。それによって獲得した利益を蓄積し，将来にむけての拡張を準備し，こうして情況の変化にたいして独立性を保つことができる。それは，ある自律的な場を創立することによって時間を制御することである。

(2) それはまた，視ること（ヴュ）によって場所を制御することでもある。空間の分割は，ある一定の場所からの一望監視という実践を可能にし，そこから投げかける視線は，自分とは異質な諸力（エトランジェ）を観察し，測定し，コントロールし，したがって自分の視界のなかに「おさめ」うる対象に変えることができる。（遠く）を見るとは，同時に予測することであり，空間を読みとることによって先を見越すことであろう。

(3) 知の権力とは，こうして歴史の不確実性を読みうる空間に変えてしまう能力のことであると定義してもまちがいではあるまい。しかしながら，こうした「戦略」のうちに知のそなえる特有の型が存するといったほうがより正確である……軍事的戦略も科学的戦略も，つねに「固有の」領域（自治都市，「中立」ないし「独立」の制度，「利害をこえた自主独立の」研究をかかげる研究所，等々）を設定してはじめて創始されたのであった。いいかえれば，こうした知の先行条件としての権力があるのであり，権力はたんに知の結果や属性ではないのである。権力が知を可能にし，いやおうなくその特性を規定してしまうのだ。知は権力のなかで生産されるのである。

（de Certeau 1980=1987: 100-1）

「戦略」は，時間の不確実性，相手の不確実な行動を，合理的に計算可能な空間に位置づけることによって，制御可能なものにしようとする。それは「自分のもの」（固有のもの）を将来へと拡張する，つまり自分が支配する領域に変えようとする。時間の「変化」は，予測不可能な偶然の連続としてではなく，「変化」として図表化・地図化され，予測されうる，記録として蓄積されるものになる。また，このことによって，ある一つの地点から（自分の場所から），さまざまな対象が見わたせるようになり，それらの対象間の関係だけでなく，個々のものに場所を割り当てることで，その動き（軌道，経路）も見通せるようになる（ヘイエルストランドの時間地理学や各種進化論，発展・発達段階などのように）。「先を見越す」ことができるようになるのである。そして，こうしたことが可能になる「先行条件としての権力」が存在している。「戦略」は，科学的である以前に，軍事的なものであったとド・セルトーは述べている。

戦略とは，ある権力の場所（固有の所有地）をそなえ，その公準に助けを借りつつ，さまざまな理論的場（システムや全体主義的ディスクール）を築きあげ，その理論的場をとおして諸力が配分されるもろもろの場所全体を分節化しようとするような作戦のことである……戦略は場所関係を特化する。少なくともそれは，各要素ごとにそれぞれ適切な場を分析的にふりあてて，さまざまな単位なり単位集合なりに特有の運動を結びつけて組織化して，時間関係を場所関係に還元しようとつとめるのだ。そのモデルは「科学的」である以前に，軍事的なものだった。

（de Certeau 1980=1987: 104）

しかし，こうした戦略は，近代の国家と同じように，その先行条件としての暴力，権力との結びつきを隠す。

戦略は，客観的測定という名のもとに，権力との結びつきをおおい隠す。権力は，固有の場や制度に護られながらそれらの戦略を維持しているのである。（de Certeau 1980=1987: 26-7）

Akita University

「みずからに固有の場をそなえ，その固有の場を所有する」(de Certeau 1980=1987: 49-50) 学問（科学）は，この「戦略」に結びついている。知によって，権力との結びつきが隠されるのである。

> 科学的実践がその固有の領域で遂行されるためには，日常的な言語的実践が（そしてその戦術の空間が）消去されねばならないのだ……科学の場所が成立するには，研究すべき対象をその場所まで移転させることができなければならない。考察しうるのは，持ち運び可能なものだけにかぎられる。根こそぎにできないものは，そもそもからして圏外に放置されてしまう……だからこそこれらの研究はディスクールに特権をさずける……ところが，パロール行為は情況からきりはなすことができないものである。
>
> (de Certeau 1980=1987: 75)

「自分のもの」を拡張する「戦略」は，その対象となるものも「自分のもの」にしていく。研究の対象は，科学的な方法という研究の規則に則って収集され，測定され，科学的な説明（ディスクール）に変換され，文字やデータとして流通する。それは対象がもともとあった場所から引き離し，自分たちの空間に位置づけ，そのことによって自分たちの論理で理解可能なものに変える。ド・セルトーは，統計についてだが，「統計調査は自己が属しているシステムを再生産する」(de Certeau 1980=1987: 25) と指摘している。どのような方法を用いようと，科学的な方法，研究は，「自分のもの」を拡張する行為である。

「戦略」は，学問にしろ，その他の活動にしろ，合理性と科学をもとに遂行されるため，それとの権力との結びつきが，客観性，中立性のなかに隠される。それは，暴力が見えなくされた弱肉強食的な自己増殖の活動ともいえるであろう。

このように「自分のもの」(固有のもの)，自分の場（領地，領域，管轄範囲，シェア）を拡張し，情況から切りはなすことの可能な「ディスクール」に特権を与える「戦略」にたいして，情況から切りはなすことができず，日常の実践のなかに埋めこまれた「戦術」とは次のようなものだとド・セルトーは説明している。

> わたしが戦術とよぶのは，自分のもの〔固有のもの〕をもたないことを特徴とする，計算された行動のことである。ここからが外部と決定できるような境界づけなどまったくできないわけだから，戦術には自律の条件がそなわっていない。(de Certeau 1980=1987: 101)
>
> なにか自分に固有のものがあるわけでもなく，したがって相手の全体を見おさめ，自分と区別できるような境界線があるわけでもないのに，計算をはかることである。戦術にそなわる場は他者の場でしかないのだ。それは，相手の持ち場の全貌もしらず，距離をとることもできないままに，ひょいとそこにしのびこむ。戦術には，おのれの優勢をかため，拡張をはかり，情況に左右されない独立性を保てるような基地がそなわっていないのである。「固有のもの（プロープル）」とは，時間にたいする場所の勝利である。これにたいして戦術は，その非 - 場所的な性格のゆえに，時間に依存し，なにかうまいものがあれば「すかさず拾おう」と，たえず機会をうかがっている。
>
> (de Certeau 1980=1987: 26)

> 戦術にそなわる場所はもっぱら他者の場所だけである。したがって戦術は，自分にとって（エトランジェ）疎遠な力が決定した法によって編成された土地，他から押しつけられた土地のうえでなんとかやっていかざるをえない……戦術は密猟をやるのだ。意表をつくのである。ここと思えばあちらという具合にやってゆく。戦術とは奇略である……戦術は，戦略が権力の公準によって編成されているのとおなじように，権力の不在によって規定されている。
>
> (de Certeau 1980=1987: 101-2)

「他者の場」を力，「戦略」によって「自分のもの」にするのではなく，「他者の場」は他者のもののまま，そのなかで「密猟」を行うのが「戦術」である。ド・セルトーは，「発話行為」が理論的指標になると述べていたが，戦術は，「実践的な狡智」と「修辞的なことばのゆらぎ」と類似していると指摘している (de Certeau 1980=1987: 105)。

> それは，機を見て言語をあやつることであり，ひとを誘惑したり，心をつかんだり，受け手の言語的ポジションを転倒したりするためのものである。文法が語の「正確さ」を監視しているのにたいし，修辞的な歪曲……は，話し手が……ある特殊な状況のもとで言語を使っている証拠である。それらは消費の指標であり，力だめしのゲームの指標なのだ。
>
> (de Certeau 1980=1987: 106)

ド・セルトーは，「住んだり，路を行き来したり，話したり，読んだり，買い物をしたり，料理をしたりする」，たいていの日常的実践が，「戦術」に属していると考えている (de Certeau 1980=1987: 26-7, 106)。そして，そ

Akita University

うした戦術には，つまり日常的実践には，たんなる消費でなく，「独創」が潜んでいると指摘している。

> そこにあるのは，「強者」のうちたてた秩序のなかで「弱者」のみせる巧みな業であり，他者の領域で事をやってのけられる技，狩猟家の策略，自在な機動力，詩的でもあれば戦闘的でもあるような，意気はずむ独創なのである。(de Certeau 1980=1987: 106-7)

ド・セルトーは，「戦術」についても「計算された行動」と述べているが，その「計算」は「戦略」における「計算」とは異なる，「実践的な狡智」という意味での計算である。「そうして頭をはたらかせた結果はディスクールというかたちをとらないのであって，それは決断そのものであり，機会を『とらえる』行為であり，そしてその際のとらえかたなのである」(de Certeau 1980=1987: 26)。

以上のような「戦略」と「戦術」は，言うまでもなく学校のなかにも見出される。学校は「戦略」の場をなしている。ド・セルトーも，「ものをなす術」，日常的実践の広大な領域は，教育によって「上から下まで」支配されたモデルとは異なるものと位置づけている。

> 「ものをなす術（アール・ド・フェール）」という広大な領域……このような「術（アール）」は，(高等教育から初等教育まで) 教育によって上から下まで資格化された文化を支配しているモデルとは別物である。このモデルのほうは，何ごとにつけ，話し手にも情況にもかかわりなく，固有の場（科学的空間とか，書くための白いページとか）を設定しようとかかり，その固有の場で，生産と反復と検証を保証するような諸規則に従ってシステムを構築してゆかねばならないようになっている。(de Certeau 1980=1987: 82)

学校が時間と空間の碁盤目型の編成によって，ド・セルトーのいう意味での「戦略」の場になっているということについては，上述のようにフーコーの『監獄の誕生』で詳細に議論されている。上でも少しふれたが，学校では，さまざまな場とそこでの行動が決められており，生徒一人一人に席（「場」）が割りふられていることもある。また，実際の場だけでなく，成績や身体能力，積極性や態度といったものまで評価され，どれくらいの位置や段階にいるのかということが管理する側にも，また子どもたち自身にとっても把握できるようになっている。この子（自分）のこの成績は，クラスのなかでどれくらいで，学年ではどれくらいで，全国では……など。

学校では，子どもたちだけでなく，先生も拡張主義的で合理化された中央集権的システムによって支配されている。さらに，子どもたちは学校において，自律，独立がもとめられ，目標を定め，「自分のもの」（成績など）を蓄積し，「自分のもの」をつねに増大させるようにもとめられる。言葉の使い方では，「正確さ」がもとめられ，余計な話しや，冗長な表現や説明などは好まれないであろう。教育では，「消費」よりも，「生産」的であることが重視されもする（たとえば，消費に低い位置づけしか与えていないネル・ノディングズの議論など）。

学校では，他者のものを横領したり，密猟したりするようなこと（たとえばカンニングをすることなど）は許されない。「自分のもの」は自分の力で，計画的に獲得していくべきものとされる。目標に向けた，計画的（戦略的）な行動が評価され，いきあたりばったり，予想から外れた行動は望ましいものとされないだろう。「狡知」など不必要かもしれないし，狡知をはたらかせると怒られるかもしれず，決まっていることをやることが重んじられる傾向もある。つまり，教育において子どもたちは，「戦略」の対象になるだけでなく，みずからが「戦略」を（より大きな戦略の枠内で）展開できるようになることがもとめられる。それが「戦術」になってしまってはいけない。

いうまでもなく，この「戦略」が支配する学校の世界において，「戦術」を繰りひろげてみせるのが，ウィリスが描きだした反学校の抵抗的な生徒たち（「野郎ども」）である。そうした生徒たちは，よく「ふざける」。

> 少し視野を広げて見せると，「ふざけ」は権威をないがしろにする「非行」一般につながっている。あたかも非公然の不法な占領軍ででもあるかのように，〈野郎ども〉は学校のすみずみを徘徊して遊びの種を探し，器物を損傷し，騒ぎたてる。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 79)

「野郎ども」は，あちこち歩きまわり，他者の場所を「不法に」占拠する。また，上述のように，決められた時間に決められた場所におらず，決められたことも行わない。このため，「できない」「落ちこぼれている」ことはわかっていても，成績を明確に位置づける（場を与える）ことが，まじめな生徒たちに比べて難しいということも生じるだろう。また，時間を将来の目標に向かって使用するというような考え方，「戦略」的な時間とは異なる考え方で行動している。

> 〈野郎ども〉の文化にあっては，彼らの時間が制度化された時間から自由であるというその一点が重

Akita University

要なのである。彼らにとって時間は，どの時点をとっても同じようにたいせつな時間として経過する。それは，計画された時間でもなく，損失として積算される時間でもなく，何らかの見返りをあてにする時間でもない。(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 76)

「野郎ども」には，将来のために今の時間を犠牲にする，将来のために今はがまんしてがんばる，という時間感覚がない。将来も今も，等しく大切な時間であり，どちらかを優先させ，戦略的に使うものではない。

ド・セルトーは，「戦術」の例として「隠れ作業」もあげており，「このうえなく規格化された近代にこのような実践がかならず存在している例は，ほかに百でもあげられるだろう」と述べているが，労働階級の反学校の生徒たちも，また労働階級の大人たちも，この「隠れ作業」を実践しており，『ハマータウンの野郎ども』にはその例もいくつか出ている。まず，ド・セルトーが「隠れ作業」あるいは「横領という実践」をどのように位置づけているのか，確認しておく。ド・セルトーは「隠れ作業」について次のように述べている。

隠れ作業は，労働と余暇による囲いこみと再生産からなるシステムのなかに，名人の業をもちこみ，ぐるになってやる競技をもちこもうというありとあらゆる実践の一例にすぎない。鬼の目を盗んで，隠した環は，ぐるりぐるり，どんどん回ってゆく。それは「なんとかやっていく」千のやりかたなのである。(de Certeau 1980=1987: 89)

「横領という実践」については，ド・セルトーは次のように述べている。仕事の時間だけでなく，余暇の時間も無駄にすることなく，計画的に使うようにされているという点については，現代の観光やレジャーについての研究でもしばしば指摘されている点である。学校でも，休みの日，特に長期の休みは，「計画的に」使用することが求められ，その間に行うべき課題も出されたりする。「休み」に休んではならない。こうしたシステムのなかで，「戦術」は展開される。

実際に起こっている事態はそんなことではなく，「民衆たちの」戦術が，そのうち体制も変わるだろうなどという甘い幻想をいだかずに，さっさと自分らの目的のために何かを横領しているということなのだ。一方で支配権力によって搾取されたり，イデオロギー的なディスクールによって頭から否認されたりしているのと対照的に，ここでは，秩序がある芸(アール)によってもてあそばれている……倫理的レジスタンスのスタイル……不屈の倫理……知の権力（われわれの権力）によって編成される体制のなかでも，横領という実践は不可能ではない。

(de Certeau 1980=1987: 85-8)

ド・セルトーは「隠れ作業」も「横領という実践」も，「名人の業」「芸」とし，「倫理的レジスタンス」とさえ言っている。ウィリスの描き出している労働階級の反抗的な生徒たち（「野郎ども」）も労働階級の大人たちも，「ぐるになって」，学校や職場で「名人の業」を披露している。

〈野郎ども〉が盗みをよくやるように，物品を「失敬する」ことは職場では日常茶飯事である。そして，暗黙のうちに了解されている基準を越えないかぎりそのような行為が仲間うちで是認されることも，2つの文化に共通している。執拗な規則違反の封じ込めを策する公式の制度の裏をかきながら，職場集団はそれ自身の結束を維持しなければならない。結束を乱す者への制裁は集団からの排斥である。

(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 137)

「倫理的レジスタンス」のなかで「ぐるになる」こと，その集団としての結束によって，そこから排斥されるものが出る可能性をド・セルトーは考慮していない。また，そもそもこうした実践は，「倫理的レジスタンス」や「不屈の倫理」ととらえることができるものなのだろうか。

ウィリスは「ぐるになって」行う行動，公式の制度を「やつら」ではなく，「自分たち」でコントロールするようにするための共同行動について次のように指摘している。

労働過程を自主管理するための共同行動の存在……これがまた，労働階級の子どもたちが学校でやろうとしていることと明らかに似ている。学校内の対抗文化も，それ自身のやりかたで，授業の過程をコントロールしようとし，公式の時間割の裏をかき，学校の日常を時間的・空間的に侵蝕しようとしているのである（Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 135)

これはまさにド・セルトーのいうところの「戦術」の実践である。こうした実践では，「やつら」と「おれたち」との対立関係が前提になっており，ド・セルトーの議論でもこの対立関係（エリート・テクノクラートと民衆）が基本になっているが，この「〈やつらとおれたち〉という哲学」について，ウィリスは次のように指摘している。

Akita University

労働階級の反学校的な少年たちがある特定の工場労働に引きよせられ，そこに定着するようになるには，いまひとつ，少々屈折した要因が介在する。それは，新しく彼らの雇用主や監督者となる者たちとの関係のつけかたにかかわっている。〈野郎ども〉が学校で身につけてきた文化については，経営の側にもそれなりの目算があるのだ。つまり，少年たちが学校制度の裏側で育んできた〈やつらとおれたち〉という対立的な考えかたは，逆にみれば，権威－服従の関係それ自体を受け入れることを前提にしている……この関係が不快であればこそ，そこをなんとかおもしろおかしいものにし，すきあらば乗じようとするのだが，その反面で少年たちの文化は，権力が位階秩序の上方に偏在する事実をとにかくも受容し，それと折り合いをつける方向に向かう。反抗がすぐれて文化的なレベルに根をおろすそのときに，権力関係そのものに挑戦する政治的なレベルの野望は失われてしまうのである。(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 271)

現実において，「倫理的レジスタンス」はド・セルトーが考えたような形で機能しないこともあるだろうし，ド・セルトーがあげていたインディオの例でも，「権力関係そのものに挑戦する政治的なレベルの野望は失われてしまう」ことになったとも考えられるであろう。ウィリスの労働階級についての議論から，現実の社会における「戦術」には，こうした問題点があることがわかる。

以上のように，「戦略」と「戦術」の区別を考えると，高所からの都市の眺めと下界の雑多な人びとの世界との対比が比喩的なものであり，高所からの眺め（というたとえ）が「戦略」に，都市のなかでの人びとの実践（というたとえ）が「戦術」に対応するものであることが明らかであろう。物理的に高い所に登っても，必ずしも「戦略」の視点をとれるわけではなく，たんなる「消費」の活動になることもあるだろうし，実際の街のなかでも「戦略」の視点に立つこともあるだろう。また同一の人物でもこの２つの視点が混在していることもある。

ところで，ド・セルトーは，「戦略」の現在の状態について，次のように指摘している。

「戦略的」モデルもまた変化している。まるでそれは，自己の成功によって自己自身を見失ったかのようでもある。というのもこの戦略モデルは，残りと区別された「自分のもの」をよりどころにしていたのに，いまやすべてが「自分のもの」になってしまっているからである。

(de Certeau 1980=1987: 107-8)

たしかに戦略的モデルは時代や社会によって変化するだろうが，合理的で拡張主義的なシステムが進展することによって，すべてが「自分のもの」になるというのは，システムを単一のものとしてとらえすぎである。「戦略」は，社会のさまざまな集団によって繰り広げられている。システムにしろ，「民衆」にしろ，「戦略」にしろ「戦術」にしろ，そのなかの多様性あるいは多元性への視点が，ド・セルトーの議論には欠けている（そのため，わかりやすい議論にはなっている）。

次にド・セルトーとウィリスの人びとの「文化」のとらえ方についての議論をみていきたい。人びとが多様であることは，集団として特定の性格を持ったものとして，つまり「文化」を持つものとしてとらえることはできないということになるのだろうか。そうでないとすれば，なぜ特定の性格をもつもとして考えることができるのだろうか。

5．集団の「ロジック」と「文化」

ド・セルトーは，民衆の文化は，ここまで説明してきたような消費行為という実践のなかにあると考えている。

〔民衆文化とは〕いろいろなものを組み合わせて利用する消費行為として言い表わせるものなのだ。このような実践には「民衆の」知恵（ratio）がはたらいており，行動のしかたのなかにおのずと考えかたがふくまれ，ものを使いこなす術とものを組み合わせる術とがわかちがたく結びつきながら発揮されているのである。

(de Certeau 1980=1987: 19，括弧内引用者)

こうした民衆の実践という「文化」（民衆文化）はとらえ難いものではあり，また，そこには「創造性」があるとド・セルトーは考えている。

こうした実践は，われわれの論理をいたずらにかき乱すかと思えば，こんどは，不意にその方向をそらせたりする……消費者が押しつけられたものを自分のものにつくりかえてゆく実践のなかから，創造性の指標となるものを識別してゆく……こうした創造性は，固有の言語をそなえようにもそなえようがないような，そんな場所にひしめきあっているのである。(de Certeau 1980=1987: 21)

こうした民衆の実践（文化）は，社会のなかで「周縁」

Akita University

的なものになっているが，「現在，周縁性は，もはや小集団というかたちをとらず，大衆的な周縁性というかたちをとってあらわれている……周縁性はひろく一般化している。この周縁性は，サイレント・マジョリティになってしまっている」(de Certeau 1980=1987: 22) と，ド・セルトーは指摘している。しかし，ド・セルトーはこの民衆の周縁性を同質のものととらえているわけではない。

> こうした周縁性がすべて同質だというわけではない……再利用しようとする手続きは，社会的情況や力関係に応じて異なったはたらきをする。
>
> (de Certeau 1980=1987: 22)

それでは，合理的で拡張主義的なシステムが進展するなかで周縁的なものになっている「民衆」の実践は，その場その場かぎりの偶然的なものであり，そこには，何か共通するようなものは存在していないのだろうか。つまり，人びとを「民衆」というようにひとくくりでとらえたり，そこに何らかの「文化」を見出すことはできないのだろうか。ド・セルトーが，「民衆」や「民衆文化」という表現を使用していることからも，そうではないことがわかる。ド・セルトーは，多様かつ創造的である実践のなかにも「ひとつのロジック」が存在していると考えている[11]。

> このように形もさまざまで，断片的なもろもろの操作は，細部にかかわり，機会に応じて変化しながら，自分が使いこなすさまざまな装置のなかにしのびこみ，姿を隠していて，固有のイデオロギーも制度もそなえているわけではないが，なんらかの規則にしたがっているのではないかと考えられる……言いかえれば，このような実践にはひとつのロジックがあるはずなのだ。(de Certeau 1980=1987: 18)

ド・セルトーは，このロジックを「ゲームのロジック」とも表現し，また即興演奏も例にあげて説明している。

> 操作といったところで，ひとつひとつの単独のトリックや手口をえがきだすだけでは十分ではない。そうしたトリックや手口を考えるためには，次のような前提がなければならない。すなわち，このような手法のあれこれには，一定数の手続きが対応しているということ（制作というものは無数にあるわけではなく，ピアノやギターの「即興」とおなじように，コードを知っていてそれを適用できることが前提となっている)，そしてまた，そこには，いろいろな情況のタイプに応じて行動を変えるゲームのロジックが存在している，ということである……ゲームというものは，さまざまな打つ手を組織化するような規則を定式化し(のみならず，すでに定石化し)，また，機に応じて即座に対応できるように行動のシェーマのメモリー（ストックと分類）をつくりあげる。(de Certeau 1980=1987: 77-8)

チェスのようなゲームであれ，スポーツというゲームであれ，ゲームには一定のルール（そしてそれを行う場）が存在するが，そこで繰り広げられる技は多様で，創造的であり（したがって，すぐれたプレーヤーは「天才」と言われる)，予想をこえたものが出てくる可能性がある。それは，日常の実践が，法などの規則や道徳的な規範，社会的規範，インフォーマルな規範などのルールのなかで，多様な行為を生み出しているのと似ている（しかし，そこでの行為について「天才」と言われることはまずないであろう。それは「日常的なこと」だからである)。ルールぎりぎりの行為やそれから逸脱する行為があるのは，ゲームでも実践でも同じである。それを取り締まる審判や警察，あるいは目撃者＝観衆の目，カメラ（テレビカメラや監視カメラなど）の目をかいくぐっての行為も存在する。

この「ゲーム」の例もわかりやすいものかもしれないが，問題もある。ド・セルトー自身もこの点について説明していないが，このゲームの例において「戦略」と「戦術」の違いはどのようになるのであろうか。ルールを設定する人や集団は「戦略」の側と言えるだろうが，それではプレーヤーはどうなのであろうか。プレーヤーは「消費」の側なのであろうか。プレーヤーは，消費者や読者以上に「戦略」的といえるのではないだろうか。ゲームにおいてプレーヤーは「自分のもの」を持ち，それを拡張しようとする，つまり「戦略」を繰り広げるのではないだろうか。そうすると，ゲームにおける「戦術」あるいは「消費」の行為とは，どのようなものなのだろうか。こうした点がゲームの例では明確ではない。したがって，ゲームに「ロジック」が存在するからといって，つまり「戦略」に「ロジック」を見出すことができるからといって（たとえば「ゲーム理論」のように)，「戦術」と「消費」の側に「ロジック」があるということはできない。たしかに，「戦術」と「消費」においても，「機に応じて即座に対応できるように行動のシェーマのメモリー（ストックと分類)」が存在する，したがって，日常の実践，発話，消費，読書を（ある社会状況のなかでは）意識することなく「日常」として遂行できるといえるが，「戦略」と「戦術」を区別する場合，「戦略」側の「ロジック」と「戦術」側の「ロジック」との関係を説明する必要が

Akita University

ある。ゲームの例，そして即興演奏の例でも「戦略」と「戦術」の違いが不明確になるため，この点があいまいになってしまう[12]。

それでは，消費の側の「ロジック」，あるいは「文化」とはどのようなものなのであろうか。ド・セルトーは，「再利用しようとする手続きは，社会的情況や力関係に応じて異なったはたらきをする」と述べていたが，そうすると「社会的情況や力関係」が近い状況にある場合，「再利用しようとする手続き」，つまり「消費」という実践に共通性が見出せることになるだろう。そこに消費，再利用における「文化」が存在することにもなる。ゲームの例はともかく，ド・セルトーは，こうしたものを「民衆文化」としてとらえようとしている。「民衆」というとらえ方はしないが，ウィリスにもこうした「文化」への視線が存在している。

ところで，この「民衆」（大衆）と「エリート」という区別について，ピエール・ブルデューは「大衆文化」に熱狂する者は「われわれの時代の『牧師』」であるとして，次のように述べている。

> 牧師たちは，社会秩序をつくりあげている法則を転倒したかたちで賞賛してみせ，支配される人々に貴族の称号を付与しています。その貴族性の原理とは，牧師たちは忘れさせようとしていますが，支配される人々が状況に順応し，既成秩序に服従し，その秩序をつくっている序列の法則に服従しているということなのです……知的文化と大衆文化とのあいだに現実に存在する二分法を消滅させるために言葉のうえでその二分法を拒否しさせすればいいかのようにふるまうのは，魔術を信仰することです。
>
> (Bourdieu and Wacquant 1992 = 2007: 116-7)

民衆の実践，再利用，消費の「創造性」を称揚することによって，ド・セルトーは（ド・セルトーだけではないが），ブルデューのいう「牧師」の役割をはたしている。これは，ブルデューがこのように言っているために正しいというのではなく，実践や消費の「創造性」を賞賛する場合，その「創造性」によって社会的にどのような状態がもたらされているのか，ということを明らかにする必要があるが，ド・セルトーはこのことを十分に明らかにしていない。こうした実践や消費にある種の「創造性」を見出しながらも，結局そのことが既存の社会の支配関係を維持してしまうことになることを示しているのが，ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』である。

ド・セルトーは文化と実践に「ひとつのロジック」を見出していたが，ウィリスは文化と集団，そしてそのなかでの創造性について，どのように考えているのだろうか。

ウィリスは，「たったひとりでなにがしかの文化をかたちづくることはできない。たったひとりで楽しみや独特の雰囲気や社会的なアイデンティティを生み出すことはできない」(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 61) と述べ，「文化」を「個人」によって生み出されるものではなく，集団にかかわるものとするが，これまでの「社会化」や「マルクス主義」での文化と個人のとらえ方にたいして，次のように述べ，みずからの考え方を示している。

> およそ文化というものは，社会化の理論が言うように，単純に外的世界が人格に内面化された体系などではないし，また，ある種のマルクス主義が主張するように，支配的なイデオロギーを受動的に押しつけられた結果であると片づけることもできない……文化はそれらでもあると同時に，少なくとも部分的には，集団的な人間主体の実践的な行為から生み出されるものなのである。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 20)

> 文化の次元でものの考えかたをうち固めてゆくということは，もちろんできあいの教訓を覚えこむことでも，ただ与えられる情報を取りこむことでもない。それは，体験的にのみ，つまり，不確かさに満ちた具体的な現実をみずからかいくぐることによってのみ獲得される。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 293)

「文化」は，個人が内面化したり，個人に外から押しつけられるもの，個人の外に物のように存在するものではなく，個人は文化を注がれる空の容器，あるいは文化という鋳型に流し込まれて鋳造される可塑的な素材でもない。「文化」は「体験的にのみ，つまり，不確かさに満ちた具体的な現実をみずからかいくぐることによってのみ獲得され」るものである。しかし，「体験」だからといって個人的なものではなく，「文化」は「集団的な人間主体の実践的な行為から生み出される」。

これが，ウィリスの「文化」についてのとらえ方であり，これはド・セルトーの文化の「ロジック」と共通する考え方である。ド・セルトーが「エリート」「テクノクラート」にたいする「民衆」の実践における文化の「ロジック」を明らかにしようとするのにたいして，ウィリスは，労働階級の文化の「ロジック」を明らかにしようとする。

文化の「ロジック」が存在するのは，民衆や労働階級だけではないだろうが，ド・セルトーにしてもウィリス

Akita University

にしても，他の集団の文化のロジックの問題，そしてそれと民衆や労働階級のロジックの関係について明確に論じていない。ド・セルトーもウィリスも，フォーマルな制度や合理的なシステムという支配の側にたいする非支配の側，日常のなかで消費し，制度を自分たちなりのやり方で使い，そして抵抗する人びとに焦点をあてている。ウィリスが取りあげている生徒たちの学校にたいする抵抗と，そこでの「文化」，労働階級の文化の影響について，もう少し詳しくみてみよう。

ウィリスは，労働階級の生徒たちが，労働階級の文化を身につけていくようになるのは，学校という場をとおしてのことだと考えている。これは，学校という「場のなか」だけで身につけるというのではなく，「学校をとおして」，学校が「プリズム」になっているというのがウィリスの考え方である。

> 学校生活という特殊なプリズムを通して……労働階級に固有の問題意識が個々の生徒や生徒集団の意識に投影される……労働階級の生徒たちは，ここで彼らなりの試行錯誤を経ながら，学校を超えて広がる階級文化に連なり，独自の解釈を加えながらもその基本線を継承し発展させる。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 17)

労働階級の文化は，労働階級の生徒たちに押しつけられ，生徒たちが労働階級の文化に染まっていくわけではない。学校と学校の外で繰り広げられる学校生活の日常のなかで，さまざまな人や出来事，問題に出あい，それにたいしてそれぞれが自分なりに判断し，「試行錯誤」を行い，「独自の解釈」を加えながら，つまりある種の「生産」を行いながら，まさにそのことをとおして，労働階級の文化を「継承し発展させる」ようになる。個々の子どもの，その場その場の「体験」をとおして，「一回性」ではなく，「文化」の再生産が行われる。

ド・セルトーの読書の例を使うと，別に読み方や解釈の仕方が決まっているわけではなく，本は自由に読んでいいものであり，いろいろなことを考えながら想像や思考をめぐらせ，独自の解釈を加えてはいても，読み方がバラバラになるわけではなく，そこに特定の読み方，解釈の共有と継承というものが見られるようになる。そうした読み方の，あるいは読まないという共同性は，（それだけではもちろんないが）学校生活を通して（学校生活をプリズムとして）形成される。結果から見ると，共有された文化によって成型されており，そこに主体性や創造性の余地などないように見えてしまうかもしれないが，それぞれの読むという行為に焦点をあてた場合，そこには「独自の解釈」や創造性の余地が見出されることになる。ド・セルトーは，この後者に注目する。しかし，ド・セルトーが，そうした読書の行為の創造性を見出し，称揚するところで歩みをとめるのにたいして，ウィリスは，その読書，解釈の行為がどのようなものなのか，そしてそれがどのような結果をもたらすのかというところまで歩みを進める。

> 労働階級の文化は「落ちこぼれる」そのやり方において，他の社会階級の文化ときっぱり断絶しているのである。その文化は，ある特定の状況に拘束されながらも，それ独自の運動様式と固有の概念をもち，立身出世してゆく人びとのことについてもそれ自身の説明原理をそなえている……それは，ある特定の時点である特定の「選択」や「判断」を余儀なくさせるような，社会関係の組織的な網の目を生きてかいくぐる経験のなかから形成される。またそのようなものとして，現実に体験する「選択肢」とその意味内容を，了解可能なかたちに秩序だてもするのである。(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 14-5)

現実を「かいくぐる」なかで，選択し，判断し，そしてみずからの体験を意味づけるなかで，特定の文化に依拠し，それを継承するようになっていく。また，どんな「現実」に出会うのかということも特定の文化に依拠している。誰に，どんな出来事に，どんな問題に，どんな考え方に，どんな物に出会うのか，そうした「偶然」に見えるものも「文化」によって形づくられている面が存在する。経済資本，文化資本だけでなく社会関係資本も文化の影響を受けるのはいうまでもないであろう。

反学校的な生徒たちが，先生に反抗し，勉強せず，「落ちこぼれる」とき，その行動にも，またその行動への意味づけも，労働階級の文化が影響しており，他の階級では同じ行動であっても他の意味づけがなされる。どのような行動を「選択」するのか，という点にも階級の文化の影響が存在している。しかし，このような「文化」の力が存在するとはいえ，ウィリスはそれが「一枚岩」をなすものとは考えていない。

> 労働階級の文化も，均一な一枚岩の構造ではけっしてない。また，植物の再生産のように，同じ根につながるいくつかの文化器官が自然に再生されていつでも同一種としての形姿を保つというものでもない……階級の文化は，ある与えられた状況のもとで，しかも必然的な対立関係にもまれながら，現実的，具体的に生みだされる。それは他の階級や制度や時勢との断続的な闘争の長き年月を経て，一定の文化としての姿かたちを整えてくる。時どきの具体的な

Akita University

環境のなかで階級の文化はそれぞれに具体的な現われかたをするのだが，その一方では，階級の文化にとっての本質的な主題がくりかえしもち出され，鍛えられていくのである。それらの主題が階級文化の時どきの現われかたの相違を越えてくりかえし浮上するのは，階級文化の同一階層に根づくすべてのものが基本的に同じ社会構造に規定されているからだ。つまり，労働階級の人びとは時と所を越えて同質の問題群に相対し，結果として同じようなイデオロギーの磁場に誘引される。さらに，階級の文化を現実に担うインフォーマルな集団社会は網の目のように結び合っており，至るところで重なり合う経験を交流する。

(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 150)

だからたとえば，異なった学校の異なった生徒集団が，相互の交流もまったくないままに，なお同じような考えかたに達するとしても，いっこうに驚くにあたらない。むしろ，そうした別個の営みが同じ結論に合流する過程で階級としての同一性が明確になる……自分たちの現在や未来を拘束している条件にそれぞれに思いを致す集団の多くが，しかるべくほぼ似通った構造を見ぬくようになる。

(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 293)

それぞれの人，それぞれの子どもたちが，それぞれの生活を送ってきたのであり，また送っている。しかし，その日常生活のなかで，その時々の具体的な問題として出会う問題群に「時と所を越えた」同質性があり，そしてそれに個々の子どもたちが対処し，判断し，意味づけするやり方にも「時と所を越えた」同質性があり，このことによって「文化」が継承されていく[13]。その基底には，「基本的に同じ社会構造」が存在している。しかし，「文化的な事象が単純に外から決定づけられて生み出されるのではない」(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 292)。

それでは，こうした実践の再生産的な過程のなかで「創造性」は，どのように位置づけられるのであろうか。

創造性とはけっして自由自在のことではない……それは，個人や集団や階級にとっての外的な要因に規定されながら，ある特定の方向に向かって展開する。(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 292)

反学校の文化が成立し一定の展開をみせる背景には，特定の歴史的現実がある。言いかえれば，それはけっして偶発的な現象ではない。だが，その歴史的必然性を認めることは，そこになお創造性の余地があることを否定するものではない。ただし，とり急ぎ2つのことを強調しておこう。ここでいう創造性とは，個々人の行為にかかわるものではなく，特定の個人の脳裏で達成されるはずもなく，意識的な企図の産物でさえない……創造的な過程はただ〈集団〉のレベルでのみ生じうるのだ。そしてもうひとつ，創造性とは言っても，それは無限になにものでも生み出す特異な性能ではない。またそれによって，未来であれ現在であれ，意のままにコントロールできるということもありえない。むしろ，いかに逆説的であろうとも，創造的な前進とはいっそう深く囚われの境遇に入りこむことなのだ。もちろん，ときには主観的な確信が，なおさら囚われの柵を高くしてしまうこともある。

(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 291)

ここは，「創造性」一般ではなく，人びと（労働階級）の日常的な実践のなかの「創造性」についてウィリスが説明している箇所だが，こうした「創造性」はド・セルトーが見出した「創造性」と似ているようで，実はまったく異なっている。

ウィリスは，こうした創造性を集団のレベルにのみ生じるものとし，さらに「無限になにものでも生み出す特異な性能」ではないとしている。これは，ド・セルトーが日常的実践の創造性を，「横領」や「読書」，「消費」といったものを例に説明し，他者の場においてなされる「戦術」として位置づけていたことと共通する側面も持っている。しかし，ド・セルトーの場合，創造性が個人の生み出すものなのか，集団のレベルに位置づけられるのかは明確ではない。横領にしろ，読書にしろ，消費にしろ，個人の領域にも位置づけることのできるものだからである。しかし，ド・セルトーは，文化の「ひとつのロジック」というものが存在すると考えており，この点を考えると，個人が行う消費，読書などの実践にも，集団としての側面が存在することになる。したがって，「民衆文化」が問題になる。

ウィリスはこの集団のレベルに「創造性」が存在すると考えるのであるが，ド・セルトーは「創造性」の位置についてウィリスのように明確には説明していないし（おそらく「実践のなかに」ということであろう），ウィリスの考える「創造性」は，集団のレベルにあるとはいえ，実践のなかに直接存在するようなものではない。

ウィリスにとって，「創造性」は集団のレベルにのみ生じるものであり，したがって「特定の個人の脳裏で達成されるはずもなく，意識的な企図の産物でさえない」。創造性を発揮した本人すら，そのことに「十分に気がつ

Akita University

かない」，そうしたものがウィリスの考える「創造性」である。しかし，その「創造性」は，けっして自由をもたらすのではなく，「いっそう深く囚われの境遇に入りこむ」という結果をもたらす場合もある。この点について，ウィリスはさらに次のように説明している。

> 文化なるものは，それを担う新しい世代がつぎつぎにくり広げる主体的な働きかけや闘争の所産である。たとえその全体が意識的に統制されてはいなくても，つみ重ねられる集団的な意志と活動には，それ独自の役割がある。それらは「創造性」の働く余地を生み出すとともに，結局のところ，「外的決定因」と称されるものをみずから更新するのである……文化なるものの主体的な形成過程と，その過程から流れ出るさまざまな人間活動こそが，一般に構造と称されるものの現実的な諸相を不断に生み出しつづけるのである。「外的決定因」なるものがおよそ生きて作用する過程には，そういう主体的な契機が含みこまれていなければならない。外からの厳格な強制力をどれほど動員しようとも，個々人が「自由に」ないしは「同意をもって」判断を下すという局面そのものを，強制力で置き換えることはできない。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 292)

「主体的な契機」，「創造性」によって，「外的決定因」を「みずから更新する」，そしてこのことが既存の社会構造の存続にとって必要不可欠のものである。個々の人が主体的であり，ゆえに労働階級の生徒たちは労働者になる，これが『ハマータウンの野郎ども』が明らかにした労働階級の「再生産」の構造である。

> 産業活動に必要な手の労働力（マニュアル・レイバー）を調達する方法は，社会が異なるにつれて異なっている。一方の極に機関銃をつきつけて輸送用トラックに駆り立てる方式が，もう一方の極に自発的な勤労奉仕軍をイデオロギー的に形成する方式が，それぞれ位置するとすれば，私たちの自由な民主主義社会のやり方はこの中間のどこかにある。つまり，露骨な物理的強制力は用いないで一定程度の自発性に依拠するような方式である。それも，手の労働が，その報酬において劣り，その社会的評価において低く，その内実において無意味さを増している，ひとことでいって，階級社会の下半分に位置づけられている，その現実にもかかわらず，である。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 13)

労働者は，強制されて肉体労働（「手の労働」）につくのではないし，能力がなくてそうなるわけでもない。自分の置かれた状況のなかで，みずから選択し，判断することによって，自発的に労働者になっていき，結果として見たときに，階級という「外的決定因」によって決定されているように見えてしまうが，その再生産の構造には「主体的な契機」が不可欠のものとして組み込まれている。

> あえて言おう。この矛盾に満ちた正逆あわせもつ過程こそが，自由主義や民主主義という諸制度のもとでなお階級社会が存続することを保証しているのだ。それは，自由ならざる境遇を自由意志で選択する過程である。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 289-90)

それでは，こうした構造のどこに「創造性」が位置づけられるのであろうか。ウィリスの「創造性」についての考え方は，「洞察」の概念に結びついている。「労働階級の文化が，〈洞察〉をはらみもつには，その文化に自律的な創造性がなければならない」(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 292)。それでは，労働階級の文化の「洞察」（この原語は‘penetrations’であり，この語の選択についてはフェミニストから批判されている）とは，何であろうか。

> 〈洞察〉とは，ある文化を共有する成員たちが自分たちを囲繞する全体社会とのかかわりで自分たちの生存の位相や条件を見ぬこうとするとき，その文化の内部で働く衝迫的な力を指している。ただし，この文化の内なる力に，本質論的な核心や，特定の個人の独創的な寄与があると考えることはできない。(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 288)

「文化の内なる力」，これが「洞察」である。この「洞察」は，「制約」によって阻害されているため，部分的なものにとどまらざるをえず，「このために個々人を囚われの境遇」に導くことにもなる。

> 〈制約〉とは，そういう衝迫力の全面的な展開を阻害したり混乱させたりする方向に働く，さまざまな障害物や牽制やイデオロギーからの影響などを指している……〈洞察〉は，たんにねじ曲げられ自律的な展開を妨げられるだけではない。それは，対抗文化の内と外に待ち受けるさまざまな〈制約〉によって，あばき出そうとする当の社会構造に結局はつなぎとめられる。つまり，見透かそうとする対象から自由であるはずの〈洞察〉は，意識にのぼらないと

Akita University

ころで――そこにまさに「部分的」といわねばならない理由がある――対象それ自体とのあいだに，ある相補的な関係を運命づけられてしまう。そういう部分性にまといつかれた〈洞察〉であるからこそ，うすうす不安を感じとることはあっても，なお自信たっぷりに選びとられる行動が，ついには個々人を囚われの境遇に導くことにもなるのだ……この道行きには，ある段階までは確かに合理的な論理があり，積極的な展開の可能性さえ潜在させている。だがそのたどり着く先は，いかにも非合理的で退行的でさえある。(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 289)

このように「洞察」が，「ある段階までは確かに合理的な論理があり，積極的な展開の可能性さえ潜在させている」にもかかわらず，部分的なものにとどまらざるをえない理由には，精神と肉体の分断（学校が重視する精神，精神労働にたいする労働階級の反抗）や，男性と女性の分断（労働階級の男性優位の意識，家父長制，男性性と肉体労働との結合），人種差別などがあるとウィリスは「制約」についての議論のなかで論じているが（したがって，ウィリスの「制約」について説明した文献や論文では，これらを「制約」の要因として説明しているが），しかし，ウィリスは別の箇所で，次のような点についても指摘している。

社会のある特定の部位に縛られた人びとが階級の文化を受け入れ，生かし，環流させる過程は，当事者たちにとってはかならずしも階級次元の文化形成過程として認識されているわけではない。同じように，基本的な社会構造上の不平等が，体制の秩序と同化した社会常識の体系を媒介にしてはじめて安定した支配関係として維持されうる事情，人びとが社会のそれぞれの部位に縛りつけられて相互に切り離され相互に対立させられている事情，これらのことも**あるがままに**認識されているわけではない。それはなぜか。社会を構成する各部署は，それぞれ独自に制度化された固有の関係でうち固められており，そのうえで一定の自治能力を分与されているために，相互に隔てられていると同時に社会システム全体からも隔てられているからである。制度として切り離された社会的部位は，それに固有の行動様式と思考様式をもつ。それぞれがみずからを合法化する固有の数理をもつだけではなくて，その転倒を企てるインフォーマルな動きもまたその部位に固有の現われかたを余議なくされるのである。

(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 151-2)

「あるがままの認識」つまり「洞察」に「制約」をもたらすのは，社会の各部分が相互に切り離されており，さらに「社会システム全体からも隔てられているからである」。その社会の各部分は，「それぞれ独自に制度化された固有の関係」があり，さらにそのなかの「インフォーマルな動きもまたその部位に固有の現われかたを余議なくされる」のである。このため，社会を構成するそれぞれの部署における「主体的な契機」も「インフォーマル」なものも，その部署の「固有の行動様式と思考様式」に縛られることになり，「社会システム全体」は，個々の部署のなかの抵抗にもかかわらず，再生産され続ける。それぞれの部署での主体性と抵抗があるために（異化と同化が平衡状態を保っているために），「社会システム全体」は存続する。

ド・セルトーは，消費や再利用についての問題として，次の点をあげていた。

残された問題は，いうまでもなく，このような違反的な性格をもった物語性が実際に社会にどのような変化をもたらしてゆくのか，ということであろう。

(de Certeau 1980=1987: 263-4)

ウィリスの労働階級の子どもたちについての議論が示しているのは，「違反的な性格をもった物語性」は社会を変えることはない，ということである[14]。したがって，ド・セルトーはフーコーとは「逆に」以下の点を問題にすると主張していたが，ウィルスの議論では，その「反規律の網の目」は，「規律の網の目」の構造そのものを変えることにつながるわけではないということになる。

さまざまな集団や個人が，これからも「監視」の編み目のなかにとらわれつづけながら，そこで発揮する創造性，そこここに散らばり，戦術的で，ブリコラージュにたけたその創造性がいったいいかなる隠密形態をとっているのか，それをほりおこすことが問題だからだ。消費者たちが発揮するこうした策略と手続きは，ついには反規律（アンチ・ディシプリン）の網の目を形成してゆく。(de Certeau 1980=1987: 18)

「戦術」はあくまで「戦略」の領域のなかでの「横領」にとどまるというのは，「戦術」と「戦略」の定義からも出てくるものであり，したがって，ド・セルトー自身，みずからの「戦術」と「戦略」の区別をしっかり考えれば，ウィリスと同じ結論にいたることになったのかもしれない。ド・セルトーのインディオの例でも，支配関係の「転覆」が行われたわけではない。「抵抗」はあくまで，支配関係の枠のなかで行われていた。ド・セルトーは，

Akita University

既存の枠内での消費の創造性に積極的な位置づけを与えようとしたのである。

ブルデューは次のように指摘している。「序列を言葉の上で非難してみても始まらないのです。変わらなければならないのは，この序列を現実的にであれ，心のなかにであれ，存在せしめている条件です」(Bourdieu and Wacquant 1992 = 2007: 117)。さらにブルデューは，「支配のアンチノミー」について次のように指摘している[15]。

> 支配される側の者が支配のアンチノミーを免れられないこと……たとえば悪ふざけや非行といったやり方で学校制度に反抗すれば，学校から放り出されてますます支配される側の状況に閉じこめられてしまいます。反対に学校文化に同化することによって同化を受け入れるなら，制度に「吸収」されてしまいます。支配される側の者は，多くの場合同じようなジレンマ，２つの解決のあいだの選択を強いられていますが，それぞれ片方の視点からすれば，他方はどっちも同じように悪い選択です（同じアンチノミーは，ある意味で女性もしくはスティグマ化されたマイノリティにもあてはまります)。
>
> (Bourdieu and Wacquant 1992 = 2007: 115)

ロイック・ヴァカンは，ブルデューの考え方を説明するなかで，この「支配のアンチノミー」から抜け出すための「社会学の任務」ついて次のように指摘している。

> 行為者たちはみな，客観性を内在化したものである主観性を基礎にして動いている限り，「表面上は行為の主体だが，主体としての構造を抱えている」存在にとどまらざるをえないのである。対照的に，自らの内なる社会的なるものについてより自覚的になればなるほど，自らの内に住まう外在性によって動かされる可能性はそれだけ小さくなる。社会分析は，制度の中ばかりか，われわれのもっとも内奥にも刻み込まれた社会的無意識を明るみに出すことを可能にするとともに，われわれの実践を誘導したり制約したりするこの無意識から自分を解放するのを可能にする……社会学の任務とは社会的世界を脱自然化し脱運命化することであり，すなわち権力の行使を包み隠し，支配の永久化を包み隠している神話を破壊することである。
>
> (Bourdieu and Wacquant 1992 = 2007: 80-1)

ウィリスは，自らの研究から導き出すことのできる提案として，いくつかの点をあげているが，以下はその提案の一部のものである。再生産の構造じたいを見きわめることによって「社会的無意識を明るみ」に出し，「脱自然化し脱運命化」することが重要だという点では，ブルデューと共通する認識を示しているともいえる。

> ＊現象の表面的なことがら……に目を奪われることなく，多少なりともまとまりをもった文化的なものの位相をそれ自体として識別すること。
> ＊……対抗文化が全体としての社会の再生産にどのようにかかわり合っているかを見きわめようとすること。
> ＊文化の生成過程をありのまま明らかにすること。神秘化したり，恣意的に助長したりしないこと。
> ＊文化のレベルにおける働きかけは早晩，構造的な限界につきあたることを覚悟すること。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 433-4)

この最後の点は，わかりにくいかもしれない。ウィリスは，個人（の問題）を個人のレベルでとらえるのではなく，それを文化のレベルに位置づけてとらえる必要があると繰り返し述べているが，しかし，文化のレベルにおける働きかけも，構造的な限界につきあたると指摘している。

> 就職指導にせよ労働階級の反抗的な生徒にたいする教育的な配慮にせよ，それら眼前の具体的な対抗文化にたいする純然たる文化レベルの働きかけにとどまるかぎり，どのようなプログラムも真の有効性をもたないと覚悟すべきである。介入や教化の試みは，その対象となる文化が構造的な諸要因と関係しつつ再生産されている以上，いたるところで意図せざる結果や矛盾に出会うほかないのである。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 431)

ここには，文化のレベルを学問がどのようにとらえることができるのかという問題についてのウィリスの考え方が示されている。ウィリスの考え方について見る前に，文化と学問についてのド・セルトーの考え方をみておく。

> たいせつなのは，確固とした学問的領域に日常的なものがしのび入ってゆくときに起こる侵入のはたらきである。勝手に日常的なものの名において語る特権を手にいれたり（日常的なものは語りえないのに)，あるいは自分がこうした一般的な場にいるのだと称したり（すると偽りの「神秘性」になりかねない)，もっと悪いときには，既成の学問に美化された日常性をそえたりすることではなく，みずからが語ってゆくその語りのただなかに，この動きをと

Akita University

りもどすことなのだ……科学的な実践と言語をその出生の地に，everyday life に，日々の生活に帰してやる。(de Certeau 1980=1987: 48)

「科学的な実践と言説をその出生の地」であるに「日々の生活に帰す」というド・セルトーの考えとは対極といえる立場をウィリスはとっている。ウィリスは，生徒たちに聞きとり調査を行い，方法としてフィールドワーク（生活誌）を重視している。

生きた文化の諸相を記録するには生活誌の形式がふさわしいし，そうしてはじめて，ある文化に潜在する微妙な意味論や価値観を描き出し，象徴的な言語の告知するところを記述することも，解釈することも可能になる。

(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 20)

しかし，同時に，生活誌という方法の限界も指摘している。

生活誌的な記述によっては，〈洞察〉と〈制約〉とが絡まりあって生じる具体的な文化現象をカバーすることはできても，この２つの動因を理論的に分離して別々に検証することはできない。

(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 289)

みかけのはなばなしさの奥底に対抗文化の核心があるといっても，それは意識の領域に明確な位置を占めてはいない。少なくとも，言葉で表現しうるかたちでは実在していない。だから，文化の奥底にひそむ核心部分の合理性を実証的に論じようにも不可能なのだ……いかに巧みな聞きとりをもってしても，この核心を当事者の口から直接に引き出すことはできない。むしろ，文化の担い手たちの表面的な言動を見るかぎり，その支離滅裂さの奥に全体を統一する中心点があるとは思えないほどである。可視的なものをなぞる生活誌的な調査の限界というのは，このことを指す。この限界を越えるためには，外面に表出される独自性や多様性や恣意性をそのまま記述するにとどまらず，それらの背後に隠されている中心点に読みいたる作業を別に行なわなければならない。現実に生きて働く文化の核心的部分を概念的に把握することがなければ，ある文化が社会にとってもつ創造的な意義を理解することはできない。(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 294)

さきほどの表現を使えば，「文化の内なる力」はフロイトの「無意識」のように「意識の領域に明確な位置」を占めておらず，言語で表現できるような形で存在していない。その「創造的な意義」は「概念」によってのみ把握することができる。ウィリスは，特に聞きとり調査における「話言葉」の問題点を次のように指摘している。

時と場所が異なれば話言葉はそれだけ一貫性を失い，葛藤をはらむ文化のたがいに矛盾する側面が脈絡を欠いたままあらわれることになる。だからたとえば，こちらの口頭の質問にたいして矛盾だらけの答えが返ってきたとしても少しも不思議ではない。話し言葉と直結する表層の意識は，状況に流されやすく，その場その場の影響を敏感に反映するのである……決まり文句のくりかえし，質問者の好感を得ようとする発言や，いかにもそれとわかる人真似がある……わざとらしい言いまわしや知的な背のびをしてみせたりもする。

(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 295)

こうしたことは調査での会話だけでなく，日常の発話行為にも見られるものであり，聞きとり調査での会話も発話行為の一種である。ド・セルトーは発話行為を，生産としての消費の理論的指標としており，発話行為の「状況に流されやすく，その場その場の影響を敏感に反映する」点に創造性を見出していた。しかし，ウィリスは，この発話行為のレベルには，とどまらないし，そこに創造性を見ることはない。ウィリスは，あたかもフロイトのように，発話行為にゆがめられた形で現われている「生成の根っこにあった〈洞察〉」を明らかにしようとする。その「生成の根っこにあった〈洞察〉」こそ，ウィリスが「創造性」を見出したものである。

この創造性のモメントが合理的な姿をとって文化の表層にあらわれてこないのは，もともとこのモメントを本分として文化の全体が形づくられているのではないからである。文化の核心にあらかじめそれがあって，ひとえにそれをこそ表現しようとする構造になってはいないのだ……〈洞察〉の現実の姿は，形成の途上ですでにねじ曲げられ，矛先をそらされ，かたちをゆがめられてしまうのである……そういうゆがめられた結果だけを見ていれば，この文化に合理的な核心がそもそも存在するとも，将来形成されうるとも思えないし，まして当事者がそれをたやすく言語化することなどできはしない。だから，この対抗文化にひそむ合理性や創造性をつまびらかにしようとするなら，文化の内面的な位相と現実の意識の表面的な位相とを区別する方法がどうしても必要

Akita University

になる……〈洞察〉は，それと意識してかたちづくられるものではない……個々人の日常の話言葉のなかに〈洞察〉の片鱗がきらめくことはある。だがそれはうつろいやすく，ときには自己矛盾を示し，たいていは無自覚である。意識してはっきりと語られる言葉は，文化の内面を探ろうとする目的からすれば，むしろ内容に乏しく，誤った判断に誘うことさえあろう。話言葉に反映されるかぎりでの文化は往々にしてその生成過程を省いた最終結果だけであり，生成の根っこにあった〈洞察〉はそこでは見るも無惨な姿をさらす場合がある。

（Willis 1977/1981 =〔1985〕1995: 294-5）

「意識してはっきりと語られる言葉は，文化の内面を探ろうとする目的からすれば，むしろ内容に乏しく，誤った判断に誘うことさえ」ある。したがって，ウィリスもブルデューと同じように，「われわれのもっとも内奥にも刻み込まれた社会的無意識を明るみに」出す必要があると考える。

ド・セルトーとウィリスは，非支配者の側の消費，実践の行為に「創造性」を読みとろうとするが，その「創造性」を位置づけるレベルがまったく異なっている。ド・セルトーはいわば表層に，ウィリスは表象にゆがめられた形で部分的に現われているものを手がかりに，その「生成の根っこ」に「創造性」を位置づける。

なるほど文化なるものは，それ自身の知見をみずから言あげすることはないかもしれない。言あげされたことはその知見のほんとうの内容とは異なるかもしれない。だとすれば，文化がなすところのものこそ，つまり実践形態におけるその論理こそが，文化の意味する内容なのである。恣意を排してその解釈学的な再構成を試みなければならない。

（Willis 1977/1981 =〔1985〕1995: 305）

ド・セルトーもウィリスも，「文化がなすところのもの」，つまり文化的な実践に注目するという点では共通しているが，ド・セルトーはそれを，不可能な試みではあるが，日常のなかで（日常から学問への「移転」なしに）とらえようとする。それにたいしてウィリスは，実践の論理を，解釈学的な再構成をとおして（つまり学問への「移転」を行うことで）とらえようとする。ウィリスは，そのことによってのみ「創造性」をとらえることができると考える。

一定の文化にたいする十全な理解は，表層であれ深層であれ，その文化自体の観察からは得られない……反学校の文化を了解しようとするなら，私たちはその文化とは別のところに出発点を求め，文化の外側をにらみながら再構成を試みる以外にはない。

（Willis 1977/1981 =〔1985〕1995: 430, 傍点引用者）

ド・セルトーは，みずからも「戦術」を展開しようとするのにたいして，ウィリスは「戦術」をとらえるために「戦略」を展開する。このことによって特定の「戦術」の全体のなかでの位置づけを明らかにしようとする。「読書」において実践をとらえようとするド・セルトーにたいしてウィリスは，「書物」のなかに構成しなおす形で実践をとらえようとする。それでは，ウィリスは実践の「生成の根っこ」にある「洞察」の「創造性」に，何を見ようとしているのであろうか。なぜ，それは「創造的」なのだろうか。

反学校の文化には，その担い手たちの置かれた状況にたいするいくつかの洞察が含まれている。十分に生かすことさえできれば，この洞察は，現在の社会を根底から批判する手がかりとなり，現存のものとは別の社会を創造する政治行動のための武器となりうるはずである……対抗文化にはらまれた洞察についても同じことが言える。それを筋の通った明確な論理として抽出できるのは書物においてのみである。現実においては，洞察にゆがみや限界や神秘化をひき起こす力が同時に働いていて，明確な論理も結局は中途半端なものに溶かしこまれてしまう。そのようなありのままの対抗文化が現実にどのように機能するかと言えば……結局は現状維持の線に沿って落ち着くところを見出す……逆に，こう表現することもできる。つまり，服従という現状維持に甘んじながらも，なお独自の確信や洞察や自負を維持する，と。（Willis 1977/1981 =〔1985〕1995: 340-1）

ウィリスは実践の「生成の根っこ」にある「洞察」に，「現在の社会を根底から批判する手がかり」，「現存のものとは別の社会を創造する政治行動のための武器」になりうるものがあると考えている。それが個人のレベルには存在しない，集団のレベルでの「創造性」である。しかし，それは現実のさまざまな「制約」によってゆがめらてしまっているために，つまり「生成の根っこ」にある創造性とつながってはいても，それが実践においては部分的な，中途半端な創造性になっているために，「結局は現状維持の線に沿って落ち着く」ようになってしまわざるをえない。

上の引用の最後の文，「服従という現状維持に甘んじながらも，なお独自の確信や洞察や自負を維持する」や

Akita University

次の文をド・セルトーなら，どうとらえるであろうか。

> 労働階級の職場文化は，職場の厳しい労働条件や他律的な服務にもかかわらず，労働する人びとがそこになんらかの肯定的な意味を見出そうとし，独自の行動規範を打ちたてようとする事実のうちに本来的な根拠を置いている。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 132)

ド・セルトーであれば，おそらく，こうした「独自の」確信や洞察，行動規範に，「創造性」を見出すことだろう。それは既存のシステムを，自分たちの枠組みでとらえなおす（横領する），生産的な消費の実践だからである。しかし，ウィリスは，そうした中途半端な創造性が「制約の容赦のない圧力」によってゆがめられたものと考える。

> 独特の「労働力」観とその意識的な形成過程は，より合理的な別の道筋をたどる可能性をひそませているのだが，さまざまな〈制約〉の容赦ない圧力に抗する術(すべ)もないまま，自律的な展開を阻止され，方向を見失ってしまう……みずからの労働力の手労働としての自己限定に自足して前途を見かぎってしまう……その視界ははばまれ，あらぬ方向にねじ曲げられているとはいえ，それでも対抗文化の〈洞察〉に支えられてのことなのである。私がこの本で明らかにしようとするのは，労働階級の文化にはまことに不可思議な契機が存在すること，まさにその存在のために，階級にとっての未来に向かう扉がみずから閉ざされることにもなっていること，これである。それは，労働力をすぐれて手の労働として供給する態度にかかわる……手労働の文化は，一方で自由と満足と体制離脱を表現し，同時に他方では労働する人びとを搾取と抑圧の制度に封じこめる。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 290)

「自由と満足と体制離脱」が同時に「搾取と抑圧の制度に封じこめる」。労働階級の反学校的な生徒たちは，自由であり，自らの生き方や選択に，学校という体制からの離脱に，（少なくともその時点では）満足している。それが生徒たちの押しつけられたものではない，「望んだ」生き方である。従順派の生徒たちを馬鹿にし，自分たちの方が優れていると感じている。しかし，その束の間にすぎないかもしれない自由によって，労働階級の仕事へと自らから進んで入っていくことになる。「戦術」は「戦略」に封じ込められる。ウィリスの議論からド・セルトーの議論を解釈すると，こうならざるをえない。

6．おわりに

ウィリスは，「現在の社会を根底から批判する手がかり」を労働階級に見出す。それは，「労働階級は，この社会を支配するイデオロギーに与するいわれをなにひとつもたない。抑圧の素顔を仮面でおおう必要もない」からである。それにたいして中産階級は，次のような位置に置かれているとウィリスは述べている。

> 中産階級はといえば，自分たちの優位をもたらす社会構造に存在も意識も根ぶかくとらえこまれている。現存する社会構造にたいする強い信仰こそ，他意のない誠実さを保ちつつ抑圧者でありつづける条件なのだ……疑問を解くことがみずからの存在を解体することであるような，疑うことなく信じなければ自滅だけが論理の必然であるような，そんな立場に中産階級は置かれているのだ。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 298)

ウィリスは，制度は現実のなかで，さまざまな抵抗（「異化」）に会い，そのなかで機能しているものとしてとらえているが，その抵抗（「異化」）が，既存の社会を批判する形で展開する萌芽を秘めているのが労働階級の「異文化が再生産される冥府のごとき世界」であると考えている。

> 制度のたてまえにせよ，道徳的または教育的なリーダーシップにせよ，それらは良き意図に満たされた静謐な空間のなかで，あたかもニュートン的な文化力学の法則に従って運動するのではない。あらゆる働きかけの現実的な有効性は，階級関係を基本とする社会構造と，異文化が再生産される冥府のごとき世界――公的な制度の目には見通すことのできない闇の世界――とが織りなすテクストとのかかわりで，はじめて考察されうるのである。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 419)

これにたいして，ド・セルトーは民衆の日常的実践のなかに，既存の拡張主義的で合理主義的なシステムへの反乱が存在していると考えるが，そうした反乱の契機が，多かれ少なかれ，社会のさまざまな領域に浸透していると考えているようである。

> 日常的実践は，ローカルな反乱，つまりは分類可能な反乱などではけっしてなく，だれにも共通した，もの静かな，なかば羊のように黙々とした，ひとつの転覆であり――われわれひとりひとりのやり遂げ

Akita University

る転覆なのである。(de Certeau 1980=1987: 391)

ひとりひとりの日常的実践のなかで転覆，反乱が行われている。すべての人が消費者でもある。社会のありとあらゆる領域，階層の人たちは日常的実践を行っており，そこにはさまざまな「もののやりかた」(*manière de faire*)，「文化」が存在している。文化は何も，民衆だけのものではない。したがって反乱は分類可能なものではない。そもそも，分類可能性は，「戦略」の領域のなかの話しであるが，「戦術」とはそうした分類を逃れるものというのが，ド・セルトーの定義であった。しかし，こうした考え方には，当然ともいえる疑問が生じるであろう。なぜ，それほどまでに転覆や反乱が社会の隅々にまで行きわたっているのに，社会は崩壊することがなく，ある程度の秩序を維持し続けるのであろうか。いわゆる社会学で「秩序問題」と呼ばれている問題である。これについて，ド・セルトーの議論は答えることができず，したがって，ド・セルトーはブルデューのいう「牧師」になってしまっている。

ウィリスも，制度にたいする異化がさまざまな領域に存在していると考えているが，既存の社会を批判する可能性は，上述のように，特定の階級，労働階級において存在する（偏在する）と，いわば反乱の可能性を「ローカル」なものととらえている。そして，この特定の階級に偏在した異化があるからこそ，あらゆる制度は「平衡状態を維持している」と考えている。

> 結局のところ，あらゆる制度は異化と同化との平衡状態を維持しているといえるであろう。その意味では，異化の存在は制度の崩壊や機能麻痺にけっして直結しない……異化には，制度として秩序だてられた部分社会に一定の変容を加えつつも，それがむしろ制度それ自体の安定的構成要因となりうる側面がある不思議に思えようとも，それゆえにこそ社会関係が首尾よく再生産されることにもなっているのだ。(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 159)

> 反学校の文化は，無意識のうちに学校教育の主要な（学校自体はそれが主要だとは自認していない）任務を，学校になりかわってやりとげる。その任務とは，労働階級の子弟の適当な部分を「自由意志において」熟練，半熟練，不熟練という肉体労働の諸分野へとふる分けることにほかならない……まことに，反学校の文化が現代教育の「危機」を生み出しているのではまったくない。反学校の文化とそれに支えられて生じる一連の事態は，むしろ真の危機の現出を抑制しているのである。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 417)

抵抗としての異化によって，社会は危機に陥るのではなく，「真の危機」が回避されている。この構造をド・セルトーは，民衆文化を美化することによって，完全にとらえ損ねているのである。

> 〈野郎ども〉は，手労働をこそ選好し，また手労働を通じて自己認識をとげようとする――少なくとも，さしあたりは。労働人口のこの部分が，階級差別を伴う社会連鎖の，さもなければ満たされるはずのない，なおかつそれでも必要な空隙を埋める。こうして，みずから劣位の部署を選びとる人びとがいるおかげで，他の人びとは，精神労働を価値とする支配イデオロギーのものさしを安んじて受け入れ，その程度はまちまちだとしても比較的に優位の部署を獲得でき，それに応じた優越感にひたることもできる……労働人口の一定部分が……肉体労働のほうを選好するなら，支配イデオロギーに固有の不備はそれでみごとに補われることになる。このようにして肉体労働の最下層が埋まれば，残余の労働人口は，それとの比較において，なにほどか精神的な労働に就いているという自己意識をもつことができる。つまりは，支配的イデオロギーの尺度の身を委ねることができる……かりに最下層の労働需要を満たす人びとにおいてイデオロギー的な上下序列のどんでん返しが行われなかったとしたら，今日の社会制度はけっして安定を保つことができないのである。
>
> (Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 348)

【注】

（1） こうした「音律」をめぐる問題については，ここで詳しく説明することはできないため，音律についての本や和泉（2003, 2007）などを参照。

（2）「消費」する側の価値への着目は，歴史的にも思想的にも，「芸術」（創造）にたいする「観賞」（消費），芸術を判断する「趣味」の肯定的な位置づけや，音楽を創造する作曲家にたいする演奏と演奏家（再現）の価値などにも結びつく。ド・セルトーは，「趣味」の創意と芸術性を，「技芸」としての「綱渡り」を例に以下のように論じている。

「ここでは，バランスを修正しながら崩さないように保ってゆくことが問題なのだが，実践者自身がそのバランスの一部をつくりなしているのである。すでにある調和から出発してある新たな全体をつくりだし，要素の変化にもかかわらず形式的な釣り合いを維持してゆくこの能力によって，技芸は芸術的生産に近い位置をしめることになる。実際的な経験において趣味が発揮するたゆまぬ創意とはこのようなものであろう」(de

Akita University

Certeau 1980=1987: 167-8)。

(3) ド・セルトーは『日常的実践のポイエティーク』のなかの，ここで引用した2つの箇所で，この「インディオ」の例を生産的な消費の実践の例としてあげている。

(4) 身体がひとつの重要なテーマをなしている『監獄の誕生』などのフーコーの著作においても，「生きられた空間」や「人」はあまり感じられないのではないだろうか。この点はド・セルトー自身の著作についてもあてはまる。実際の「生きられた空間」と，それを理論的に考察することとは別の問題であろうが，ド・セルトーは，本稿の以下で説明するように，この区別じたいを無効化しようとする。こうした「人」の感じられない研究については，アーヴィング・ゴッフマンも問題にしている。

(5) こうした関係は「人間関係論」において有名な「公式組織」と「非公式組織」と結びついている，つまりド・セルトーの「消費の手続き」は「非公式組織」での人間関係にも見られる。この点も以下でとりあげるが，ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』では，労働階級の工場，そして学校での非公式組織が焦点になっている。

(6) 教育と子どもと「活字」との関係については，ポストマン『子どもはもういない』を参照。

(7) 教育の内容についてド・セルトーは次のようにも指摘している。「いまや大切なのは流布すべき思想よりも普及する手段のほう……伝達手段がメッセージにとって代わっている」(de Certeau 1980=1987: 327)。これはマクルーハンの議論も思い起こさせる考え方であり，さらに検討する必要があるだろうが，本稿ではこの点については取りあげない。

(8) ド・セルトーは次のようにも述べている。「アイロニーに満ちた賢者の狂気は，特異な能力を失ってしまうこと，そうして自分もまただれもと変わらぬ者，だれでもない者，コモンよくある〔共通の〕話のなかの一人にすぎないのだと悟ることに結びついている」(de Certeau 1980=1987: 47)。ド・セルトー自身は「賢者の狂気」に陥っているのであろうか。

(9) ウィリスは次のようにも指摘している。「反学校的な少年たちの言語行為は，制度順応的な生徒とくらべてけっして見劣りはしないし，イメージを生き生きと喚起する力においてはむしろ前者が後者に勝るほどである」(Willis 1977/1981 = 〔1985〕1995: 303)。

(10) ド・セルトーの「戦略」は，用語法からもわかるように，『監獄の誕生』や『言葉と物』などのフーコーの議論をもとにしている。ド・セルトーは，それにたいするものとして「戦術」を展開する。

フーコーは，現代を「空間の時代」(「他者の場所——混在郷について」) とし，また「ベルクソン的な時間の特権視＝空間の無視」(『哲学の舞台』) を批判し，「空間」を重視する。ド・セルトーは，空間の特権視＝時間の無視の「戦略」にたいして，時間を重視した「戦術」を位置づける。この「戦術」の特徴は，ベルクソンの「持続」の概念と，そして「戦略」はベルクソンの「空間」の概念と重なりあう。時間の特権視の状況において，空間の問題を提起したフーコーにたいして，ド・セルトーは，もう一度，空間にたいする時間を重視する視点，戦術を展開しているともいえるだろう。「戦略のほうは，時間による消滅にあらがう場所の確立に賭けようとする。いっぽう戦術はたくみな時間の利用に賭け，時間がさしだしてくれる機会と，樹立された権力に時間がおよぼす働きに賭けようとする」(de Certeau 1980=1987: 105)。ド・セルトーの「戦術」についての説明は，ベルクソンの「持続」についての説明と驚くほど似ている。

(11) こうした考え方は，ド・セルトーも『日常的実践のポイエティーク』で参照しているピエール・ブルデューの「実践」についての考え方と共通する点があるが，以下で論じるように，ブルデューは「民衆」というくくり方はしない。

(12) 「戦略」と「戦略」の区別を行わない，あるいは両者の定義や説明を変えれば，ゲームも実践を説明する例として使用することはできるだろう。

(13) この判断や選択，意味づけの同質性がどのように形成されるのかを説明するには，ブルデューの「ハビトゥス」にあたるような説明装置が必要であろう。

(14) ウィリス自身も，社会の変革の契機を読み取ろうとしてはいるが，このことをうまく示せていない。

(15) ブルデューは，「個人」について次のように述べている。「社会的世界のなかに存在するものは，関係です。行為者同士の相互行為でも間主観的な結びつきでもなく，マルクスがいったように『個人の意識や意志からは独立して』存在する客観的関係なのです……個人がただの『幻想』であるとか，個人が存在しないなどということを意味しているのではありませんが。にもかかわらず，科学は人々を行為者として構成するのであって，生物学的な個人とか演技者 acteurs，あるいは主体 sujets としてではないのです。行為者は，界のなかで有効な効果を生み出すために必要な特性と有しているという事実ゆえに，社会的に界のなかで現に作動しているものとされるのです。界について知ることから出発しなければ，その界の一員となっている人物の個性，独創性，視点を（その界での）立場にしているものは何かをじゅうぶんには把握できません」(Bourdieu and Wacquant 1992 = 2007: 131-44)。

こうした個人についての考え方は，ウィリスにも共通しており，また個人に還元する「アトミズム」を批判するド・セルトーにも共通している。「関係（つねに社会的）のほうがかかわる両項を規定するのであって，その逆ではないこと，またひとりひとりの個人というものは，こうした相関的な規定性が複雑に絡みあいながら作用する場であって，そのような絡みあいはかならずしも首尾一貫していない(たいてい矛盾している)」(de Certeau 1980=1987: 12)。ド・セルトーもウィリスも本文や参考文献にブルデューの文献をあげている。

Akita University

【参考文献】

Bourdieu, Pierre and Loïc J.D. Wacquant, 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology,* The University of California Press.（= 1992, *Réponses: pour une anthropologie reflexive*, Paris: Édition du Seuil）（= 2007年，水島和則訳『リフレクシヴ・ソシオロジーへの招待——ブルデュー，社会学を語る』藤原書店.）

Chartier, Roger, 1992, *L' ordre des livres: Lecteurs, auteurs, bibliothèques en Europe entre XIVe et XVIIIe siècle*, Aix-en-Provence : Alinéa.（= 1996年，長谷川輝夫『書物の秩序』ちくま学芸文庫.）

de Certeau, Michel, 1980, *L' invention du quotidian,* 1, *Arts de faire*, Paris: U.G.E.（= 1987年，山田登世子訳『日常的実践のポイエティーク』国文社.）

Foucault, Michel. 1966, *Les mots et les choses: une archèologie des sciences humaines*, Paris: Edition Gallimard.（= 1974年，渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物——人文科学の考古学』新潮社.）

———, 1975, *Surveiller et punir: Naissance de la prison*. Paris: Gallimard.（= 1977年，田村俶訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社.）

和泉浩，2003，『近代音楽のパラドクス—マックス・ウェーバー「音楽社会学」と音楽の合理化』ハーベスト社.

———，2007，「ウェーバー『音楽社会学』における合理化のパラドクスと『音楽的聴覚』」『社会学年報』第36号，東北社会学会.

Postman, Neil, 1982, *The Disappearance of Childhood*, New York: Delacorte Press.（= 小柴一訳，1995年，『子どもはもういない』新樹社.）

Willis, Paul, 1977/1981, *Learning to Labour: How Working Class Kids get Working Class Jobs*, Farnborough, Hants: Saxon House, 1977; New York: Columbia University Press, 1981 (with a new introduction and afterword).（= 〔1985〕1995年，熊沢誠・山田潤『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗　労働への順応』ちくま学芸文庫.）